

え？

「若旦那、そいつは私だつて知りたんですよ」アツシヤの横をおつかなびつくりで通りながら言つた。ヨブはアツシヤを死骸の生き返つて来たものだと思つてゐるので、此上なく嫌つて恐れてゐた。

「だが口を利いちやなりませんよ若旦那。あなたは今までひどい病氣だつたんですよ。随分心配させましたぜ。ところで此の御婦人が」と言ひながらアツシヤを見て「どいて下さればスープを持つて参らうと存じますか」

ヨブの此の言葉は、レオの注意を、黙々として立つてゐるその「御婦人」の方へ向けた。

「何だ？ あれはウステーンでは無いのか。ぢやウステーンは何處にあるのだ？」レオが言つた。

すると初めてアツシヤがレオに向つて口を切つた。その言葉は嘘言であつた。

「ウステーンは人を訪ねに行きました。でそれ、私がウステーンの代りに、あなたの侍女になつたのです」と彼女は言つた。

知覚を取戻しかけてゐたレオは、アツシヤの死骸の様な着物にも驚いたが、その銀の様な髪にも面喰つたらしかつた。然し何とも返事はせずに、スープをガツガツ飲んで了ふと、顔になつて再び夜迄眠つた。二度目に眼を醒すと彼は、何事が起つたかを私に質問し初めた。然し私は出来るだけそれに答へるのを翌日まで延ばした。翌日になつて起上つたレオは不思議な程元氣がよかつた。それで私は、彼の病氣のことや、私のした事などを話した。でもアツシヤの事は今の所あまり話せなかつた。唯、彼女は此の國の女王であること、そして吾々に對して好意を持つてゐること、厄運を掛けるのは彼女の好きでしてゐることなどは話して聞かせた。何故ならば、言ふまでも無く私

は英語で話してゐるが、どうもアツシヤの顔の表情から推して考へると、彼女は吾々の話してゐることが解るのではないかしらと思つたからだ。それに私はアツシヤの注意を思ひ出したのだ。

次の朝になるとレオは殆んど全快して起上つた。横腹に受けた負傷は癒つてゐたし、生れつき丈夫な身體は、あの恐ろしい熱病の病後の疲勞を拂ひ落してゐた。その全快の仕方は實に速なものであつた。アツシヤがやつたあの素晴らしい薬品のおかげだらうと私は思つた。それから、多分は病氣が極く短期間のものであつたために、ウンと身體が弱らなかつたせいだらう。健康が回復すると、レオは沼地で意識を失ふ迄に起つたあらゆる冒険のことを思ひ出した。そして、ウステーンの事をも思ひ出したのは勿論である。彼はウステーンにかなり愛着を感じてゐるらしかつた。事實彼は私に向つて此の可哀相なウステーンの事を矢張り早く訊ねた。私はその間に答へやうとはしなかつた。何故ならば、レオが最初に眼を醒ました後で、アツシヤは使を以て再び「レオにウステーンの話をしてはならぬ」と嚴格に注意をしてよこしたからだ。そして婉曲な言葉で、若し私が命令に背向いたら最後だと言つて來た。その上に更に、彼女は私に、「どうしても餘儀ない事以外に私のことをあの方に喋らない様に。私がその内に自分で何もかも話しますから」と言つた。

全く、彼女の振舞はずつかり變つてしまつた。彼女は自分の舊世界の戀人だとレオの事を思ひ込んでゐる。で、こいつはいつつきり、何でもかでも折さへあつたら「あなたは私の戀人です」と押しつける様なことをするに相異ないと私は豫期してゐたのだ。所が、事實はそれに反して、彼女はさうしなかつた。何か彼女自身に理由があるらしかつた。どんな理由なのか、その時の私にはまるで見當がつかなかつた。唯彼女のする事と言へば、靜かに丁寧に

レオの用事を足すことだけであつた。その卑下した丁寧さは、以前の彼女の尊大な振舞とは實に極端な對照をなしてゐた。彼女は始終レオの名を呼ぶのに、まるで崇敬と言つた言葉調子で呼んだ。そして出来るだけレオの側になる様にした。此の不可解な女に就てレオの好奇心が、非常にそゝられたのは言はずもなである。丁度それは數日前に私の好奇心がそゝられたのと同様であつた。特にレオは女の醜をしきりと見たがつた。私は、細部にわたらぬ程度に、姿や聲同様に女の醜は美しいとレオに話して置いたのだ。

レオが朝飯を甘味さうに食つて了ふと吾々はアツシヤの前に行つた。と言ふのは、聖の家來達はいつ何時でも吾々を通す様にと命ぜられてゐただからだ。

「まあようこそ」アツシヤは極めてやさしい聲で言つた。

「立てる様におなりでほんとに結構ですわ。ようござんすか、若し私が最後にあなたをお助けしなかつたら、そんな風にしゃんと兩足で立てる様にはおなりでなかつたでしやう。だが危険はもう去りました。これからの私の心配はあなたに危険が又とやつて来ない様にする事ですわ」

彼女は此の「危険が又とやつて来ない様にする」と言ふ言葉に千萬無量の意を含めて言つた。

レオは頭を下げた。その後で、出来るだけ立派なアラビヤ語で、見もしらぬ他國人を親切丁寧に看護して呉れて有難いと言つた。

「いゝえ」彼女はやさしく答へた。「一體此の世はあなたの様な方を永生きさせて置けないものです。美しい方と言ふものは滅多にあるもんぢやありませんからね。禮をおつしやるには及びません。あなたがいらしつたので私は幸

福になつてゐるんですもの」

「フン、叔父さん」レオは英語で私に言つた。

「此の御婦人なかなかさばけてゐますね。こいつはどうもクローバの中におつこちた様なもんだ。これぢや叔父さんもせいせい甘味い汁を吸つたんですね。全く、こりや何て綺麗な腕だらう！」

私は靜かにする様にレオに眼顔で知らせた。それは、私をちらちら見詰めてゐたアツシヤの面覆の下の眼が、疑ふ様に光るのが、チラリと見えたからだ。

「たしか」彼女は言葉を繼いだ。召使共がよく御用は足してゐるだらうと思ひます。こんな貧弱な所ですけれど、若し何か楽しい事でも御坐いましたら、それはあなたのためだと思つて下さつて、速應なさらぬ様にして下さい。他に何か欲しい物がありますか？」

「あります」レオは急いで答へた。「私は、私と一所にゐましたあの女が何處に行つて了つたものだから知りたいのです」

「あゝ」とアツシヤは言つた。「あの娘、さうです、私は知つてゐます。だが何處へ行つて了つたものか存じません。あの娘はどつかへ行きたいと言つてゐましたが、何處へ行つたか知りません。若しかすると戻つて来るかも知りません。それとも戻つて来ぬかも知れません。病人の看護をするのは退屈なものですからね。それに、此の國の聖人の女は、浮氣ですからね」

レオは此の言葉で、どきまぎしたと同時に、苦しくなつた様子だつた。

「どうも變だなあ」私に對して英語で言つた。その後で女神に向つて附加へた。「僕には解りません。あの若い婦人と、私は——そう、お互に尊敬し合つてゐたのです」

アツシヤは非常に調子のよい聲で、ちよつと笑つた。そして話題を變へた。

十九 「私に黒山羊を呉れ！」

既共か手真似で、ピラリが拜調を願ひたいと待つてゐる由を女神に告げた。そこで、「這つて參る様に」との命を受けて、ピラリは例の通りにビクビクしながら這つて室に入つて來た。そして、「女神様、並びに白人の方々が御出まし下されば、舞踏の用意はすつかり出來まして御坐います」と申述べた。

間もなく吾々は皆立上つて出發した。アツシヤは白衣の上から黒の外装で身を包んでゐた。(ついでに言つて置くが、先日夜中に焚火の側で呪咀をしてゐた時に着てゐたと同様の外套である)。舞踏は、戶外の、大洞窟の正面の平かな岩原で取り行はれることになつてゐた。で吾々はその方へ歩いて行つた。洞窟の口から十五歩ばかり離れた所に三脚の椅子が置いてあつた。まだ舞踏者は姿を見せないで、吾々はその椅子に坐つて待つてゐた。その夜は、眞の闇ではないが殆ど全く暗かつた。それに月もまだ昇つてゐないし、一體どうして舞踏が見られるのだらうと思つた。

レオがアツシヤに向つてその事を尋ねると、彼女はちよつと笑つて

「今に解りますよ」と言つた。

その言葉がまだすつかりアツシヤの口から出きらない間に、黒い人影が四方八方から勢よく突進んで來た。その一人々々が各自に火を持つてゐる。その火を最初吾々は、燃えてゐる大きな炬火だと思つた。とにかく何しろ、實に恐ろしく燃えさかつてその焔は、持つてゐる人間の後方へ一ヤード以上も立ちなびく程であつた。その人々は段々と前進して來た。五十人あるひはそれ以上の人々が、焔を吹いてゐる物を持ちながら進んで來る。その有様は恰も地獄から澤山の惡魔が出て來た様である。レオが最初に、此の人々のかついでゐる荷物の正體を發見した。

「おやおや」彼は言つた。「あれは火のついた人間の死骸だぞ！」

私は繰返して凝視した。レオの言つた事は全くほんとうだ。吾々を歓迎するための舞踏を照す炬火は、洞窟の中から持ち出された人間の木乃伊であつたのだ！

此の燃えてゐる死骸を擔いだ人々は次第に突進して來た。吾々の前面二十歩ばかりの地點で合し、その恐ろしい荷物を組合せて巨大な篝火を作つた。大きな音を立て、焔をあげて實に何と言ふ盛んな燃え方であらう！ タールの桶だつて、決して此の木伊乃の様に燃えはしない。

こればかりではなかつた。私は不意に一人の大きな男が、木伊乃の胴體から落ちた燃えてゐる人間の腕をつかんで暗闇の中へ走り去つて行くのを見た。その男は忽ち立止まつた。すると一條の火柱が高く空中に立昇つて、闇を照らした。その火の立昇つてゐるランプも光りに照らされた。そのランプは、岩に刺してある棒杭にくり附けた女の木伊乃である。走つて行つた男はその木伊乃の髪の毛に火を附けたのだ。その男は又二三歩進んで二番目の木伊

乃に火を附けた。それから三番目、四番目と火を付けて行つて、しまひには吾々の周囲三方は、猛る様に燃えてゐる死骸の輪で圍まれてしまつた。

ネロは、タールの中に漬けた基督教徒を生きたまゝ燃して自分の庭園を照したが、現在の吾々がそれと同じ光景を目撃してゐるのだ。多分ネロ皇帝以来これが最初のことであらう。唯仕合せなのは吾々が今見てゐるランプは、生きた人間で無い。

吾々は突立つて、たまげて見詰めてゐた——驚いて、でもそれでゐてその不思議極まる光景にウツトリとなりながら見詰めてゐた。そして心の中では、燃えてゐる死骸の中に曾ては包まれてゐた人間の靈魂が、死の影の中から出て来て、此等の冒険者に復讐をしまいかと、半ば豫期する様な氣持であつた。

「ホリー、私はあなたに不思議な觀物を見せてあげると約束してありましたわねえ」アツシヤは笑つた。此の女の神經ばかりが、何の動する所も無いらしかつた。「で、御覽なさい！ 私は嘘は言はなかつたでしやう。それに又、此の觀物には教訓が含まれてゐるのですよ。それはね、未來を信じるなかれと言ふ事です。誰だつて未來がどうなるかなんて知つちやゐないのですからね。だから現在のために生きる事です。死んで塵になつて了ふ事を逃れやうなんかと努力しないがよい。人間の最後と言ふのは塵になつて了ふ事らしいんですからね。あなたはどう思ひます？ 此のもうとつくの昔に忘れられて了つた貴族や淑女達が、何時かそのきやしいやな身體が、野蠻人の舞踏を照すために燃やされると言ふ事を若し知つてゐたとしたら、どんな氣がしたでしやう？ だが見なさい、役者達がやつて來ました。快活な連中ではありませんか、ねえ？ 舞臺に灯がつかました。さあ芝居が始まりますよ」

彼女がさう言つてゐる間に、人間の篝火の周圍に二列の人影が進んで來るのが見えた。一方は男で、一方は女である。その數百人ばかりもあつて、例の通り豹の皮と羚羊の皮を身體に着けてゐる。その連中は、全く黙りこんだまゝ、吾々と篝火の間で向ひ合つて立つた。それから舞踏が始まつた。その舞踏と言ふのが一種地獄の踊とも、悪魔の踊とも言はれん様な凄惨な踊である。それを描くことは全く不可能である。然しその踊には足を突出したり、足を片方づゝ二度突出したりする箇所が、かなりあるにも拘らず、馴れない私共には、舞踏と言ふよりも芝居の體に見えた。

最初に暗殺の所作があつた。その次にその暗殺される人が生きながら埋められる所作、それからその男が墓塚から滾滾き出る所作があつた。

然し突然に、此の面白い芝居は中止された。人々は少しざわめいた。そして力の強い一人の女が、不淨な昂奮のために酔ふて氣が狂つた様になつて、吾々の方へ向つてヨロヨロして跳んで來た。その女と言ふのは、踊つてゐる者の中でも一番元氣よく踊つてゐたから前から私の眼にとまつてゐた。彼女は此方に向つて進んで來ながら叫んだ。

「私は黒山羊が憎しい。どうでも黒山羊が憎しい。私に黒山羊を呉れ！」そして女は岩の床の上にとタリと倒れて口から泡を吹き、身體を跳きながら「黒山羊を、黒山羊を」と叫んだ。そのありさまは人間の頭で考へる事の出來る最も恐ろしい光景であつた。

忽ちにして、大部分の舞踏者達は、その女の周圍に集まつた。然し一部分の者共はまだ背後の方で鈍ね廻るのを

續けてゐた。

「悪魔が乗移つたのだ」舞踏者の中の一人が叫んだ。走つて行つて黒山羊を持つて来い。やい悪魔、靜かにしろ、靜かにしろ！ 直ぐに山羊は呉れてやる。もう連れに行つたから」

「私は黒山羊が怒しい。どうでも黒山羊が怒しい！」泡を吹きながら轉がり廻つてゐる女が再び叫んだ。

「よしよし、山羊はもう直ぐに来るぞ！ 靜かにしろ、いゝ悪魔だからね！」

尙もそれは續いた。すると遂に、山羊が到着した。附近の家畜小舎から連れて來られたもので、角を掴まれて引き出されて來た。

「その山羊は黒いか？ 黒い山羊か？」悪魔に悪かれた女は叫んだ。

「さうだ、さうだ、夜の様に黒い奴だ！」そして今度は傍を向いて「お前の後に山羊を置いとくんだぞ。臂と腹に白い毛のある事を悪魔に見せてはならないぜ。今直ぐだ、悪魔。それ、早く、山羊の咽喉を切れ。血は何處にあるのだ？」

「山羊！ 山羊！ 山羊！ 私に、その黒山羊の血を呉れ！ どうでも飲むのだ、どうでも飲まなきゃならぬ、それがお前達には解らないのか？ おゝ、おゝ、おゝ、私に黒山羊の血を呉れ！」

その時「ギヤーツ」と言ふ恐怖に満ちた聲がした。可哀相に山羊が犠牲として殺されたのだ。そして、直ぐに、一人の女が、血の一杯はいつてゐる皿を持つて走つて來た。その時極度に狂ひ狂ひ、泡を吹いてゐた悪かれた女はその皿を取つて、血を飲んだ。すると忽ちにして正氣に歸つた。そしてケロリとしてヒステリー、若しくは發作、

又は神憑りにかゝつてゐたらしい跡も見せなかつた。又、何だか解らないが、今の今まで苦しめられてゐた「悪魔」と言つた様なものゝ後かたも無かつた。その女は腕を差伸ばして、微笑つた。そして舞踏者の方へ引退つて行つた。舞踏者達はその時、やつて來た時と同じ様に二列に並んで去つた。吾々と篝火の間の空地はガラソとなつた。私は餘興はもう済んだものだと思つた。それに、氣持が悪くなつたので「もう立つていゝか」と女神に尋ねようとした。その時突然に、變なものが出て來て篝火の周圍を跳び歩いた。最初私はそれを獅々だと思つた。反對の方からは獅子が一匹出て來た。獅子と言ふよりは獅子の皮を着た人間と言つたがいゝだらう。

その獅々と獅子とが出會つた。すると今度は山羊が現はれて來た。その後から牛の皮を被つた奴がやつて來た。その牛は滑稽な風をして角を前後に揺つてゐる。牛の傍からは小山羊がやつて來る。その後から南亞弗利加種の羊、その後には東亞弗利加種の羊、それに續いて數匹の山羊や、その他多數の獸類がやつて來る。その中には、若い女で大蛇の鱗の着いた皮を纏ふてゐるものも混つてゐる。その大蛇の尾は後方五六ヤードも引ずつてゐる。

これらの假面をかぶつた連中が皆集まると、重々しい不自然な身振で踊りまわり始めた。そして銘々が自分の扮してゐる動物の鳴聲を真似はじめた。その唸る聲や、クンクン言ふ鳴聲や、蛇のシューツ、シューツと言ふ聲などのために、しまひにはその邊の空氣がさながら命あつて生きてゐるものゝ様に思はれた。

これが永い間續いた。しまひに私は此の身振芝居に飽きて了つたので、アツシヤに「レオと私で人間の死體の篝火を見に廻り歩いていゝか」と訊ねた。アツシヤはそれに反對しなかつた。それで吾々は左の方へ折れて歩き出した。燃えさかつてゐる人間の體を二三個見た後で、その奇怪な氣味の悪い光景にすつかり氣持が悪くなつたので、

引返そうとした。その時である。一人の舞踏者が吾々の注意を惹いた。その舞踏者と言ふのは、特に元氣の好い豹の扮装をしてゐて、他の連中からは離れた所にゐた。そして吾々の直ぐ傍の所でグルグル踊つてゐたが、次第々々に、燃えてゐる二個の木伊乃から等距離にある一番暗い蔭の方へ行く。好奇心に驅られて吾々も隨いて行つた。すると不意にその豹が、前方の暗闇の中に駆け込んだ。そして駆け込んで行きながら、今迄四つ這ひになつてゐた身を起して

「おいでなさい」と囁いた。その聲はウステーンの聲だと言ふ事が解つた。

私に相談する暇もなくレオは道を曲つて、ウステーンに随つて外の暗闇の中へ行つた。で私は恐怖心で一杯になりながら、急ぎ足で二人の後を追つた。豹は五十歩ばかりも前へ進んで行つた。――焚火や篝火の光もこれだけ離れてゐれば大丈夫とゞきはしない。――そこでレオは豹にと、言ふよりはウステーンに追付いた。

「おゝ、あなた」彼女の囁くのが聞へた。「どうとうあなたを見付け出しました。聞いて下さい。私は何時あの全能の女神から殺されるか分りません。私がどんな風にしてあなたから引離されたかは、きつと御々さんが話したでしやうね？ あなた、私はあなたを愛してゐます。そして此の國の習慣に依つて、あなたは私のものです。私はあなたの命を救ひました。なのに、あなたは私を捨てる事が出来ますの、ねえあなた！」

「無論捨てるなんて言ふ事はない」レオは叫ぶ様にして言つた。「ウステーン、僕はお前を捜してゐたのだよ。女王の所へ行つて解しやうぢやないか」

「いえ、いえ、女神は私共を殺してお了ひなさるに違ひありません。あなたは女神の御力を知らないのです。其處にゐる御々さんは見たのだから知つてゐらつしやいます。ようござんすか！ もう一つしきや路はありません。若しあなたが私のことを心から愛してゐらつしやるなら、たつた今、沼地を越えて一緒に逃げて下さい。そしたら多分のがれる事が出来るでしやうから」

「レオ、どうぞ」と私が言ひかけたがウステーンがそれをさえ切つた。

「いえ、此の方の言ふ事を聞いてはなりません。早く、早くして下さい。私共が呼吸してゐる空氣の中にさへ死が漂ふてゐます。若しかすると今の今でさへ女神は私共の言つてゐる事を聞いてゐらつしやるかも知れません。」そして、それ以上愚圖々々してゐないで、ウステーンは、自分の言ふ事を強めるために、レオの腕の中に身を投げかけた。その時に彼女の頭髮から豹の頭がすべり落ちた。すると、頭髮の上の白い三本の指の印が星の光りに微に輝いてゐるのが見えた。

レオが女に關する點は餘り意志が堅固で無いと言ふ事は私は知つてゐた。だから此の無鐵砲な事態が怖くなつて、私はもう一度口出しをしやうとした。その時である。私は背後に銀の様な短い笑聲を聞いた。私はグルリと振返つた。すると、おゝ恐るべし！ 其處に女神その人が居たのだ。ピラリと他の二人の男の聲が附添つてゐる。私は喘いだ。そして倒れさうになつた。それと宜ふのが、かくの如き局面が、きつと何か恐ろしい悲劇に終ることを私はよく知つてゐたのだ。それに、その悲劇の最初の犠牲者となるのは、どう考へても私らしい。ウステーンは、愛人を抱く手かゆるめて、兩手や眼を覆ふた。一方レオの方は、自分達が今どんなに恐ろしい位置にある

かと言ふ事をよく知らないで、唯顔を赤くしたばかりであつた。そして、そんな風な保庇にかゝつた者が自然にす
る様に馬鹿になつた様な顔をした。

二十勝 利

それから暫くの間私が今迄経験した事がない様な苦しい沈黙が覆いた。アツシヤがそれを破つた。レオに呼びか
けたのである。

「いゝえ、あなた。そう差しがらなくても宜しゆうございます」

彼女は非常にやさしい口調で言つた。然しその口調にはそれでも鐵の輪の様な固い所があつた。

「なんて奇麗な観物です事、豹と獅子ですわね！」

「あゝ、うるさいなあ」とレオが英語で云つた。女神は言葉を續けた。「ウステーン、お前の髪の毛の上の白いすぢ
の上に月の光が落ちてゐなかつたらほんとに私はお前がこゝにゐると云ふ事に気が付かないで通り過ぎて仕舞う處
だつたよ」そして彼女は今地平線の上に現はれた處の月の出の明るい光を指さした。

「まあいゝ、まあいゝ、舞踏は終つて了つた。御覽蠟燭も燃え落ちて仕舞つたし何もかにもがひつそりと灰になつ
て仕舞つた。だからお前は戀をするのにふさはしい時だと思つたのだらう、ねウステーンや、私は又お前が私の云
ふ事に背くとは夢にも思はなかつたものだからお前は今既に遠くの方にゐるのだと思つてゐたのだ」

「私を弄ばないで下さい」可哀さうなウステーンはうめいた「私を殺して下さい、さうぞかたをつけて下さい」
「いゝえ、なりません、どうして殺せと云ふの？ 温かい戀の唇のところから冷たい墓の入口へそれ程早く行く
と云ふのはあまりいゝものではないだらうからね。」

そしてアツシヤは二人の壁へ合圖をした。すると壁は忽ち進んで来てウステーンの兩腕を捉へた。憤怒の叫び聲
を上げながらレオは自分に近い方の壁へ飛びかゝつた。そしてそれを地上へ投げ倒した。それから壁の上に足をか
けて突立ち乍ら壁に決然たる色を表し拳を固めた。

再びアツシヤは笑つた。「巧く投げ飛ばしましたわねえ。ほんの此の間まで病氣だつた人にしては、貴方は随分強
い腕をお持ちですね？ だけどどうぞお願ひですからその男を殺さないで私の云ふ通りにさせて下さい。その男は
ウステーンに害を加える様な事はありません。夜の空気が冷えて來ましたからその女を私の所へ頂戴ませう。貴
方のお氣に召す女だから、私の氣にも入るに違ひありません。」

私はレオの腕を掴んで、人事不省につてゐる壁から引離した。すると、半ば呆然となつてレオは手を離して壁の
側から離れた。

間もなく吾々はアツシヤの居間に到着した。

「で、ホリー」女神は口を切つた。「あなたは、私が此の（と言ひながらウステーンを指差しながら）悪い事をする
女に立去れと命じたのを聞きませんでしたね。それからあなたがまるで祈る様に願ふものだから、私もつひ此の女の命を
助けてやつたのですよ。そのあなたが、今夜私の見た事に關係があると言ひのは、一體どうした事です、えゝ？ 返

事をなさい。そして自分のために眞實のことをすつかり言ひなさい。私は此の事に就ては嘘を聞きたくはありませんからね」

「女王、あれは偶然だったのです」私は答へた。「私はそれに就ては何も知らないのです」

「ホリー、私はあなたを信じてゐます」彼女は冷やかに答へた。「そして私があなたを信じてゐると言ふ事は、あなたのためには幸福なんですよ。では總ての罪はみな此の女にある譯ですね。」

「僕は此の女に何等の罪も有ると思ひません」とレオがさへ切つた。「此の女は他の男の妻ではありません。そして此の恐ろしい國の習慣に依つて私と結婚をしたらしいぢやありませんか。だつたら、誰も害を受けた者は無いぢやありませんか。どつちにしろですわね、奥さん、此の女が爲した事なら私が爲した事です。ですから若し此の女が罰を受けるんだつたら、私も罰して下さい。それから、いゝですか」レオは憤怒のためにいきり立ちながら、言葉が續いた。「若し、あなたが、此の壁で壁の悪漢共に、ウステーンに手でも觸れさせたら、僕が其奴を粉々に引裂いてやりますからね！」

アツシヤは氷の様に沈黙しながらそれを聞いて、何事も言はなかつた。然しレオが言葉を言ひ了はると、彼女はウステーンに對して呼び掛けた。

「これ女、何か言はなければならぬ事があるかい？ お前は時鹿な愛の娘なものだ。鳥の羽毛の様なものだ。お前は私の意志の大風に乗って遊らつて、とるにも足らない自分の情熱の最後までフワフワと漂ふて行かうと思つてゐるのだね！ どうしてこんな事を爲したのか、まあ解るだけは解つてあげるから、話して御覽」

ウステーンは、その立派な身體を伸ばせるだけ上の方にのぼし、豹の皮を頭の後へ拂ひのけながら言つた。

「あゝ女神様。私がこんなことを爲した譯と言ふのは、私の愛が、墓よりも深いからです。此の方は私の魂が還んだ方です。此の方の無い私の生活は、生きた死に過ぎません。だから私はこんな事をしたのです。だから私は自分の生命を賭てやつたのです。今はもう私の命はあなた様の御怒りで、無いものだと思つてゐます。それでも尙、私は生命を賭した事が嬉しいのです。生命を賭して、そのために生命を取られなければならぬ様になつたのが嬉しいのです。さうです。何故ならば、此の方は一度私を抱いて、そしてまた、私を愛してゐると言つて下さつたからです」

此處でアツシヤは、椅子から半ば身を起した。そして又腰を下した。

「私は魔術を持つてはあません」ウステーンは言葉を續けた。その聲重の豊かな聲は、しんかりと強く響いた。「そして私は女王様ではありません。又いつまでも生きてゐると言ふ譯はありません。然し女の魂と言ふものは水の中に沈む程重いものです。たとへその水がどんなに深くても、女王様、そして、女の眼と言ふものはすばしこひものです。あなた様の面覆の中だつて見えます！ 聞いて下さい、私は知つてゐます。あなた様は自分で此の方を愛してゐらつしやるのです。だもんだから邪魔になる私を殺さうとなさるのです。え、私は死にます。死んで暗い所へ行きます。死ねば何處へ行くんだか私は知りません。ただこの事は知つてゐます。私の胸の中には輝く光が有つて、ランプで見る様にその光に依つて、私は眞實の事を見るのです。私の亡い未來の事も見えます。未來のことが巻物の様に私の前に開けて見えるのです、私は自分の夫を初めて知つた時（レオを指差しながら）この方が私に下さる結婚の贈り物は死だと言ふ事も知つてゐました。その考へは全く不意に私の心の裡に起りました。」

「だけど私は引返さうとはしませんでした。自分の命は投出してかゝつてゐたのです。すると、それ、今死ぬ時がやつて来たのです！ 現在では私はその事を知つてゐます。だから私は今死の運命の階段の上に立ちながら、あなたが私を殺しても、何の利益にもならぬ事をよく知つてゐるのです。此の方は私のものです。そしてたとへあなた様の美しさが星の中の太陽の様に光り輝いても、あの方はいつまでも私の夫で、あなた様のものになる事は無いでしやう。此の世であの方があなたを愛の眼差しで見つて、妻とお呼びになる事は決して無いでしやう、私には解りません。あなたの運命も定つてゐるのです」そしてウステーンの聲は靈感を受けた女傳言者の叫び聲の様に高くなつた。「あゝ、私には解ります……」

すると、ウステーンの叫び聲に答へて、憤怒と恐怖の叫び聲が起つた。私は頭をめぐらした。アツシヤが身を起して、手を伸ばしてウステーンを指差しながら突立つてゐる。ウステーンは突然に黙つてしまつた。私は可哀相な此の女を見詰めた。すると私が見詰めてゐる間に、彼女の顔には苦しきやうな、固定した恐怖の表情が現はれた。それは以前彼女があつた荒々しい歌を歌ひ出した時、私の見た表情と同じ表情であつた。その眼は大きくなつた。鼻孔は膨れた。そして唇は蒼白くなつた。

アツシヤは一言も言はなかつた。音も立てなかつた。唯ズイと身を伸して、片腕を突出してゐる。そしてヴェイルを着た背の高いその體は白練の様にブルブル顫えてゐる。眼はヂツとウステーンを見詰めてゐるらしい。女神に早詰められながらもウステーンは兩手を頭に置いて一聲鋭い叫び聲を擧げて、二度グルグル廻つてから、ドシンと後の方に倒れた。床の上に俯伏せになつて倒れてしまつた。レオと私はウステーンの方へ突進んで行つた。彼女は

石の様になつて死んでゐた。恐るべき女神の持つてゐる一種不可思議な電力か、若しくは駭倒する様な意志の力で叩き殺されてしまつたのだ。

暫らくの間レオは、何事が起つたのかよく解らずにゐた。然しそれがハツキリと解つて來ると、彼の顔は見るも怖ろしい形相に變つた。彼は荒々しい憤怒の叫聲を立て、ウステーンの屍骸の傍から立上つて、身を跳へすや、文字通りにアツシヤめがけて躍りかゝつた。然しアツシヤはじつと見てゐて、レオが近寄つて來るのを知ると、又片腕を突出した。するとレオはヨロヨロと後方へよろめきながら私の方へやつて來た。そして私がレオを掴まなかつたらぶつ倒れる所だつた。後でレオが私に話した事であるが、その時彼は不意に胸を激しく撲られた様に感じた上に、自分の體の中から男性と言ふものがすつかり取去られでもした様に、全く元氣がくぢけたと言ふ。

その後でアツシヤが口を開いた。

「若し私の裁判があなたを吃驚させましたら、どうぞ許して下さい」彼女はレオに向つて柔しく言つた。

「此の悪魔奴！ 許して呉れつて！」可哀相にレオは怒りと苦しみのために拳を固めながら終鳴つた。「此の人殺し女め！ 許して呉れなんて！ 誓つて、僕は若し出來たらお前を殺してやるんだ！」

「いや、いや」女神は同じ柔しい聲で答へた。「あなたは解らずにゐるのです。もう知つてもいい時が來ました。あなたこそ私の戀人です。私の美しい、力の強いカリクラテスです！ カリクラテス、二千年の間私はあなたを待つてゐました。そして遂々あなたは私に戻つて來ました。それから此の女は（と屍骸を指差しながら）私とあなたの間に立つて邪魔をしたのです。だから殺したのです。カリクラテス！」

「それは嘘だ」レオが言った。「僕の名はカリクラテスでは無い！僕はレオ、ヴィンシイだ。カリクラテスと言ふのは僕の先祖のことだ。——と、まあ僕は信じてゐる」

「あゝ、カリクラテスと言ふのはあなたの先祖の名だと御自分で仰有るのですね。ところで、あなたも矢張りカリクラテスです。生れ變つて戻つて来たカリクラテスです。そして私のなつかしい夫です！」

「僕はカリクラテスでは無い。それからそのあなたの夫になつたり、あなたに關係のある何かになつたりする位なら、僕はとうの昔に、地獄の悪魔の夫になつてゐるでしやうよ。あなたよりは、悪魔の方は未だいゝでしやうからね」

「そんな事を仰有るのですね。カリクラテス、そんな事を仰有るのですね？ いゝえ、だがあなたはもう随分永い事私を見ずにゐたので、昔の事を少しも憶えてゐないのです。それでも、カリクラテス、まだ私はウンと綺麗ですよ！」

「人殺し女、僕はあなたが嫌だ。見たいとも思はない。あなたがどんなに綺麗だつて、それが私にさうしたと言ふのです？僕はあなたが嫌ですよ」

「それでも、ほんのものの少し経てば、あなたは私の膝の所に這ひつくばつて、私を愛してゐると誓ふでしやうよ」アツシヤは氣持のよいからかふ様な笑聲を立てながら言った。

「さあ、今よりいゝ時はありません。此處で、あなたを愛してゐた此の死んだ娘の前で、私の言ふ事がほんとうだ

と言ふ事を證明しやうではありませんか。

「カリクラテス、さあ私を御覽なさい！」

そして、彼女は不意に身體を動かして、被つてゐる紗の様な布を拂ひ落とした。そして、短い上衣と、蛇の様な帯だけになつて立上つた。その見事な輝く様な美しさと堂々たる優美さを見せて、下に落ちた着物の中から立上つた。丁度それは水の上に美の女神が立上りでもした様な有様であつた。若しくは、ガラテヤが大理石の中から立上つたか、美しくなつた人魂が墓の中から起上りでもした様であつた。アツシヤは突立つて、その深い輝く眼で、レオの眼をヂツと見詰めた。するとレオの握り固めてゐた拳がゆるんで、今迄跳びかゝりそうに坐つた、顔へてゐる顔付が、アツシヤに凝視されてゆるんだのを私は見た。彼の疑惑と驚嘆とが次第に讚嘆に變つて行つて、その讚嘆は更に憧憬に變つて行くのを私は見た。そして彼が蕩揺けば蕩揺く程、女の恐ろしい美の力は、次第々々に彼の心に強い力を持つて来て、彼の官能を擡んで引づつて、レオの身體の中から心臓を引づり出す様に思はれた。これと同じ過程を私は前に經たものではなかつたか？レオの二倍も歳を取つてゐる私自身が、これと同じ過程を經験したのではなかつたか？現在彼女の快い情熱的な眼が、私を見詰めてはゐないにも係はらず、私は又更に同じ過程を經験しつゝあるのではなかつたか？然り、正しくさうだつたのだ！あゝ、洗ひさらひ言つて了へば、私は實に此の瞬間に、氣も狂ふ様な激しい嫉妬のために身も忘れる程になつてゐたのだ。實に恥かしい話したが、私はレオを目掛けて跳びかゝりもかねなかつたのだ！此の女は私の道義觀念を滅茶苦茶にして、殆ど破壊してしまつた。だが實際、此の女の超人的な美しさを見た人なら誰でも滅茶苦茶な氣持になるに相異なるのだ。然し、さうしてだ

か解らないが、私は自分を制した。そしてもう一度、この恐ろしい悲劇のやまを見るために振向いた。

「お、これは驚いた！」レオは囁いた。「あなたは女なんですか？」

「女ですとも、真正正統の女です。そしてあなたの妻です、カリクラテス！」彼女は答へた。そして丸い象牙の様な両の腕を、レオの方へ差伸ばして、あゝ、實に優しく頬笑んだ！

レオはいつまでも凝視に凝視を續けた。そして彼が次第々々にアツシヤの方へ近寄つて行くのを、私は徐々に見た。不意にレオの眼が哀れなウステーンの屍骸の上に落ちた。すると彼は身を顧かせて、じつと立止まつてしまつた。

「僕にどうしてそんな事が出来るものか？」レオは嗚聲で言つた。「あなたは人殺し女です。ウステーンは僕を愛してゐたのだ」

見よ、彼は既に自分がウステーンを愛してゐた事を忘れかけてゐる。

「それは何でもありません」アツシヤは呟いた。その聲は、樹の間を吹き過ぎる夜の風の様に優しく響いた。「それは全く何でもありません。若し私が罪を犯したのだとしてもその代りには私の美しさがあります。私が若し罪を犯したら、それはあなたを私が愛してゐるためだつたのです。ですから私の罪をわきに追つ拂つて忘れて了へばいぢやありませんか」

さう言つて彼女は再び両腕を差出して「さあ」と囁いた。そして次の數秒の間には、事はもう終つてゐた。

私はレオが挿入してゐるのを見た。――更に逃州さうとして身を廻らせるのを私は見た。然し女の眼は鐵の鎖よ

りも強くレオを引いた。そして彼女の美と、集中された意志と情熱の魔は、彼の内部に這入り込んで、彼を支離した。さうだ、實に彼の爲に喜んで命を投出した程彼を愛してゐたウステーンの屍骸の前に於てさえさうだつたのだ。これは實際聞いても恐ろしい悪い事だ。然しこれに就てはレオを除き咎め立てしてはならぬ。又、とうとう罪惡を犯す様なはめになつてしまつたと言ふ譯にもならない。彼を惡に引入れた誘惑の女は、人間以上のものであつたのだ。彼女の美しさは、普通の人間の娘なぞ及びもつかぬ程美しかつたのだ。

私は再び見上げた。すると最早彼女の申分の無い美しい身體は、レオの腕の中に抱かれてゐた。そして、彼女の唇はレオの唇に押し附けられてゐた。かくして、レオ、ヴァインシイは、その死せる愛人の屍骸を祭壇にして、今人殺しをしたばかりの女と、結婚の約束をしてゐたのである。――未來永劫迄の約束をしてゐたのである。

突然に、蛇の様な動作で、アツシヤはレオの抱擁から抜け出した。そして再び勝ち誇つて嘲る様な低い笑聲を立てた。そして死んだウステーンを指差しながら言つた。

「カリクラテス、私はさつき、ほんのもう少し経つたら、あなたは私の膝の所に這ひつくばるに違ひないと言つたでしやう？ 全く、ほんの僅の間でしたわねえ！」

レオは屈辱と悲運に呻いた。それと言ふのが、アツシヤのために打ち負かさねながらも、彼は今自分が墜ちてゐる墮落の深さに氣が附かぬ程正氣を失つてはゐなかつたのだ。反對に彼の善なる性質は、惡に墮落した性質に對して、武装して立上つた。丁度私があゝの晩に知つたと同様である。

アツシヤは三度笑つた。それから、素早く布で身體を包んだ。そして、吃驚した眼でまぢまぢと此の不思議な光

景を見詰めてゐた壁に向つて合圖をした。その壁の娘は彼方へ去つて、直ぐに二人の男の壁を従へて戻つて来た。女王はその三人に又合圖をした。すると三人とも、可哀相なウステーンの屍體の手を握んで、洞窟の彼方へ、奥にかゝつてゐるカーテンの間を通つて、引つて行つた。レオは暫くの間それを見詰めてゐた。その後で、手で顔を覆ふた。私の昂奮しきつた空想の眼には、引つて行かれてゐる死んだウステーンの硝子の様な光を放つてゐる眼までが、吾々をチツと見守つてゐる様に思はれた。

「死んで了つた者は行つて了」と無氣味な行列がカーテンの後に消え去つてカーテンが捲かれて元の位置に返つた時、アツシヤは嚴かにさう言つた。その後で前に私が述べた様に、荒々しく調子を變へてアツシヤは面覆を拂除けた。そして古代の詩的なアラビヤ人風なやり方で、勝利の讃歌（或は婚姻の祝歌）を歌ひ始めた。それは實に豊かな美しい歌ではあるが、英語に直すのは困難極まるものである。讀んだり書いたりするよりは、實は音楽に合はして歌ふべきものである。歌は二部に分れてゐて、一部は叙述的で、一部は個人的な歌である。で、私が憶えてゐるだけを書いて見れば、まあ次の様なものだ。――

戀は砂漠の花の如し。

それは唯一度花を開きて死して行く、アラビヤの蘆薈の如く、辛き生の空虚の中に花開き、それが美しの輝きは、嵐の上に光る星の如く、荒蕪の上を照らすなり。

生の荒野に唯一つ全き花あり。

その花を戀なり！

人の世の迷ひの霧の中に、唯一つの暁かぬ光あり。

その光を戀なり！

人の世の絶望の夜に、唯一つ望みあり。

その望みこそ戀ならぬ！

戀ならぬものは總て空し。總て戀ならぬものは水の面に動く影なり、風と空垂なり。

それからアツシヤはレオの方を向いた。そして手をレオの肩に掛けて、前よりも朗々と、又更に勝ち誇つた様な調子で歌を續けた。その口を出る言葉は一句一句釣合が取れて、ロマンティックな散文から次第に莊重な韻文になつて行つた。――

あゝ我が戀人よ。われは永き歲月を、汝を愛し來りぬ。然もわが愛は弱らざりき。

われは待ちたり。かくて今わが願ひはわれと共に在り。

われは死に勝ちぬ、かくて死は、逝ける人をわれに賣し來りぬ。

さればわれ悦ぶ、未來は樂しければなり。

夜は谷間に迷ひうせぬ。

曉は山の端に唇を附く。

戀人よ、柔かに吾等は生きん。

安らかに吾等は歩まん。

吾等王の冠を戴かん。……

「カリクラテス。あなたは私の言葉を多分信じなさらないでしよう。多分あなたは私があなたを誘つてゐるのだと思つてゐらつしやるでしやう。私が此の二千年間生きてゐたと言つても、あなたは私のために生れ變つて来た方だと言つても信じては下さらぬでしよう。」

彼女は暫く口を噤んだ。それから直ぐに言葉を繼いだ。

「ではよろしい。若しあなたの心が、まだ此の大きな眞實を頑固に認めようとなさらぬならば、それに又不思議で理解出来ないとお思ひになる事柄に就て現の證據を見たいとお思ひになるんだつたら、今だつて證據を見せてあげましよう。ホリー、あなたにも見せてあげましよう。一つずつランプをお持ちなさい。そして私が連れて行く所へ附いて來なさい。」

思案もせずに、私とレオは、ランプを取つて彼女に従つた。實際、私だけの事を言へば、考へれば考へる程次第々に、黒い不可思議の壁に向つて何うすると言つても仕末に了へなくなつて來て、都合が都合で何かしても駄目な事が解りきつてゐる様な氣がして、不思議を授る事も殆どする氣が無くなつてゐた。アツシヤは、自室の端の方へ靜々と歩いて行つて、一つのカーテンを上げた。すると一個の小さな階段が露れた。それは此の薄暗いコールの洞窟にはよく有る風の階段であつた。その階段を降りて行きながら私は、その階段の石段の中央がウンと凹んでゐるのに氣が附いた。その凹み方が實に酷くて、或物に至つては、本來七寸程もあつたらしい高さか、三寸半位に減つてゐる。所で、私が先に見た洞窟内の他の階段は殆ど全々凹んでゐるなかつた。それは階段を踏んで通つた者と

言へば墓に新しい荷を載いで來た者ばかりなのだから凹んでゐないのは、まああたりまへなのだ。

私はその階段の下に立止まつて、凹んだ段々を見詰めた。すると振返つたアツシヤが、私を見た。

「ホリー、此の岩を凹ましたのは誰の足だらうと、あなたは考へてゐるのですか？」彼女は訊ねた。「それは私の足ですよ。こんなに軽い私の足なのですよ！ 私は其處にある段々がまだ新しく平かだつた時の事を思ひ出す事が出来ます。だけど二千年以上の間、毎日々々私は其處を通つたのです。で御覽なさい、私の草履が、固い石を凹ましてしまつたのです。」

階段は一個のトンネルに通じてゐた。トンネルの入口を入ると何歩も行かぬ所に、カーテンの垂れた扉が開かれてゐた。一目見ると、そのカーテンが先夜、私のはね上る火焰で呪つてゐるアツシヤの恐ろしい有様を見た時、私の直側にあつたカーテンと同じものと言ふ事が解つた。私はそのカーテンの模様を見覚えてゐた。そして此のカーテンを見ると、私は、あの恐ろしい光景を眼前にマザマザと思ひ起した。そして思ひ出しても私は頼へた。アツシヤは墓所に入つた。其處は墓所だつたのだ。で吾々も彼女の後に従つて入つた。私は一方此の墓所の秘密が明らかになりかけたのを覺んでゐた。而もその解決に面と向ふのが恐ろしかつた。

二十一 死者と生者の邂逅

「この二千年の間、私が眠つた場所を、さあ御覽なさい」アツシヤは、レオの手からランプを取つて、自分の頭の

上に差上げて言つた。ランプの光線は床の凹地に落ちた。この凹地で私は、あのアツシヤの意のままにはずんでゐた火焔を見たのだ。だが今はもう既に火は消えてゐた。石の寢臺の上には布に蔽はれた白い人の姿が長々と横はつてゐた。その上にもランプの光線は落ちた。又此の墓場の塵埃つて凸凹と曲つた壁や、もう一つの石の棚の上にもランプの光線は落ちた。その石の棚は、前の人間の身體の乗つてゐる石の寢臺の反対側にあつて、その間の距離は洞窟の幅だけであつた。

その岩の上に手を置いてアツシヤは言つた。——「此處に私は此の歳月毎晩々々寝て來ました。上衣を一枚かけたぎりで寢ました。それは彼處に」と言つて硬ばつた人の姿を指差して、「私の夫が死んで堅くなつて臥つてゐるのに、私が柔かな思ひをして寝るのは、不似合ですからね。此處で毎晩々々、私は冷たい夫を友にして眠りました。しまひに、御覽の通りに此の厚い石の板が今私共が通つて來た階段同様私の身體があるために薄く磨れてしまひました。カリクラテス、あなたが死の眠に落ちて、姿を消してゐた間だつて、私はあなたに對してそれほど貞節だつたのですよ。所でねえ、あなたに不思議なものを見せましよう。生てゐるあなたに、死んでゐるあなたを見せてあげます。それと言ふのが、此の二千年間私はあなたをよく世話してやつたんですからね、カリクラテス。よろしくござんすか？」

私とレオは何とも答へずに、驚いた眼を見合せた。それ程此處の光景は恐ろしく莊嚴であつた。アツシヤは進んだ。そしてその手を屍衣の端に置いた。その後で、更に語つた。

「たとへ、これがあなたに不思議に思はれても吃驚してはいけません。現在こうして生きてゐる人間は以前にも生

きてゐた事があるのです。私共の持つてゐる姿や形だつて、太陽はよく知つてゐるのです。—— 濃厚い死の眠は、人間の心の中にあるいろんな記憶の板を消し去つて、忘却と言ふもので悲しみを封じて呉れるんです。でなければ、その記憶や悲哀は生涯から生涯へと私共を追ひかけて、苦惱が溜つて頭の中が一杯になるでしやう。そして遂には頭が破れてしまつて、最後の絶望のために發狂して下でしやう。唯死の眠があるからさうならず済むのです。然しそれでも「個性」に對しては「時」は無効です。ですからカリクラテス、ほんの此間此世に生れて來て、生きてゐるあなたが、死んだあなた自身を見ても、怖がらないで下さい。その死んだあなたと言ふのは、ズツと昔此世に生きて呼吸してゐて、死んで行つたのです。私は單にあなたの「命の書」の一頁を開いて、その上に書いてある事を示すに過ぎないのです。御覽なさい——」

彼女は急に腕を動かして、冷たい人の姿から屍衣を引きのけた。そしてランプの光で其上を照した。私は見た。そして驚いて後へタチタチとなつた。吾々の前の屍架の上に白衣を纏つて、ちつとも腐敗せずには横たはつてゐる屍骸が、レオ、ヴァインシイの身體をつくりなのだ。私は、其處に生きて突立つてゐるレオから、其處に死んで横たはつてゐるレオを見詰めた。そして、その死んだレオと生きてゐるレオとの間に、何の差異も見出すことは出来なかつた。唯、若しかして差異があると言へば、屍架の上のレオの方が見た所、老けてゐる事位だ。何處から何處迄までもそつくりだ。さうだ、異常に美しいその小さな黄金色の巻毛の刈込み方までそつくり同じだつた。見てゐると死者の顔の表情は、レオがグツスリ寝込んでゐる時、私が時折見た事のあるレオの表情に似てゐる様にさえ思はれた。此の死んだレオと生きてレオとの様に酷似してゐる双生児を私は未だかつて見た事が無い。と言つたら此の二人

がどれ程似てゐるかを、まの言へる位のものだ。

レオは死んだ自分自身を見て、さんな気がしてゐるんだらうと、それを見るために私は振返つた。すると彼はいくらか知覺を失つてゐた。彼は二三分間歇つて凝視してゐた。そして最後にやつと口を切つたが、何を言ふかと思ふと、叫び出した。

「それを包め。そして僕を此處から連れて行つて呉れ」

「いゝえ、お待ちなさい、カリクラテス」とアツシヤが言つた。さう言ふアツシヤの突立つてゐる有様は、女と言ふよりも神に憑かれた神巫の様であつた。その頭上に差上げたランプの光は、彼女の麗な美しさと、屍架の上に在る屍衣を着た不思議な冷たい死體との上に漲りそゞいだ。彼女の嚴かな言葉は次から次と口を衝いて出て來た。その言葉には、實に私に描くことも出來ぬ言葉の偉力と自由が在つた。

「お待ちなさい。私は或事をあなたに見せたいのです。それは、私の罪は、どんなに小さな罪でもあなたに隠して置いてはならぬからです。ホリー、あなたその死んだカリクラテスの胸の所の着物を開きなさい。多分私の夫は死んだ自身に觸るのは怖いでしょうから」

頭へる指で私は言はれる通りにした。私にすれば生きてゐるレオにそっくりな人が眠つてゐるのを手で觸るのは神聖なものを潰す様な気がした。直ぐに冷たい死人の胸は裸にされた。すると胸の心臓の上に一つの傷が現はれた。その傷はたしかに鎗か匕百かで受けたものだ。

「解りますね、カリクラテス」彼女は言つた。

「では、あなたを殺したのは此の私だと言ふ事を御知りなさい。此の私はあなたに生命の代りに死を與へたのです。

私かあなたを殺したのは、あなたが愛してゐらしたアメナルタスと言ふ埃及女のためです。それと言ふのが、アメナルタスは奸策をめぐらしてあなたの心を掴んでしまつてゐたのです。そして、あの女は私に取つては強過ぎるので、先刻あのウステーンを殺した様に殺せなかつたのです。私は気が急いでゐたし、むきになつて怒つてゐたので、ついあなたを殺してしまつたのです。で此の永い歲月の間、私は死んだあなたを哀悼して、あなたのいらつしやるのを待つてゐたのです。それ此の死體はあなた自身の體ですよ。此の永年の間、これは私の冷たい慰めでもあり友でもありました。今はもうこれは要りません。私にはもう生きてあなたが眼前にあるからです。そして此の死體は、私が忘れ度いと思ふ事の記憶を掻き立てるばかりで、外に何の役にも立ちません。ですから、塵に返してしまひましょう。私はこれが塵になるのをひきとめてゐたのです御覽なさい！ 私は此の幸福な時のために用意をして置いたのです！」

そして、アツシヤは、自分の寢臺に使つてゐたと言ふ他の櫛（又は石架）から大きな硝子の様に作られた把手の二つ附いてゐる一個の大きな容器を取上げた。その容器の口は膀胱で蓋がしてあつた。彼女は此の蓋をゆるめた。そして、先づ身を屈めて、死者の白い額にやさしく接吻してから、瓶の蓋をはづして、瓶の中に入つてゐる液を、注意深く死體の上にふりかけた。その液が一滴でも、吾々や自分自身に觸れぬ様に、非常に要心しながらやつてゐるのが分つた。その後で彼女は残つた液體を、死者の胸と頭の上に注ぎかけた。忽ち濃々たる水蒸気が立昇つて、息の詰まる様な瓦斯が洞窟一杯になつた。此の瓦斯のために、恐ろしい酸が作用を續けてゐる間は、何を見る事も

出来なかつた。酸と言ふのは、私は其液體を強い酸性の調製薬の一種だらうと推測したので。死骸の横たはつてゐた場所からは鋭いシューシュー言ふ音やパチパチと言ふ響がして來た。然しその音は瓦斯が消えて了はぬ間に聞えなくなつた。とうとう瓦斯は全く消えた。唯僅に死骸の上に、瓦斯の小塊がまだ漂ふてゐるのみであつた。二三分間の内には此の小な瓦斯の雲も消えてしまつた。すると、永い歲月の間、昔のカリクラテスの遺骸の乗つてゐた石の上には、今はもう何も見られなかつた。唯僅の出てる白い粉が掌に二三杯ほど残つてゐるばかりだつた。一見奇怪極まる事ではあるが、これは事實であつたのである。酸が完全に死骸を亡ぼしたので。所々には石の中へまで酸は喰入つてゐた。アツシヤは身を曲げて一握りの白い粉を掴んで、それを空氣の中に投げた。投げながら彼女は静かな莊重な聲で言つた。

「塵は塵へ歸れ！ 湯去は過去へ！ 死者は死者へ！ カリクラテスは死んだ。そして再び生れて來た！」

灰は吾々の周圍に漂ひ、岩の床の上に落ちた。その間、吾々は恐ろしい霧の中、落ちる灰を見守つた。言葉も出ない程、氣は轉倒してゐたのだ。

「ではもう私の傍を去つて下さい」アツシヤは言つた。「そして出來れば戻つて下さい。私は見張りを考へなければなりません。明晩は他處へ行きますが、明晩行く路を私が踏んだのはもう随分以前のことですからね」

それで吾々は頭を下げて、彼女の所を離れた。吾々の部屋に行く途中、私はヨブはどうしてゐるだらうと思つて彼の寢所を覗いて見た。ヨブは、吾々があの殺されたウステーンに逢ふほんの前に、アマハツガー人の舞踏にすつかり怖れをなして、彼處から逃げ出してゐたの

だ。見ると罪の無いもので彼はグツスリ寝込んでゐた。ヨブの神經は、大概の無教育な人間同様に、非常に弱い。それが恐ろしい今日の最後の場面を見ずにすんだのと思つて私は喜んだ。

その後、吾々は自分達の部屋に入つた。レオは生きてゐる自分そつくりの固くなつた死骸を見て以來、殆ど意識を失つゝ癡な状態であつた。それが此處に來ると遂々、急流の様な苦悶の情を爆發させた。

「叔父さん、僕はどうしやう？」レオは苦悶の極、私の肩に頭を置いて唸つた。「僕はウステーンをみすみす殺させて了つた。だがまあそれは僕にはどうにも出来なかつたのだ。然し、それから五分間の内に僕は、ウステーンの死骸の上で、ウステーンを殺した女に接吻してゐたんだ。僕は墮落をした。だが」そして此處で彼の聲は沈んだ。「僕は此恐ろしい魔女に反抗する事は出来ない。明日になつたら又自分は今日と同じ事をするだらうと言ふ事が僕には解つてゐる。自分が常にあの女に支配されてゐる事が僕には解つてゐる。あの女を再び見なかつたら、僕は生涯あの女以外の女の事は考へないに相異なる。僕は、針が磁石に従ふ様にあの女に従はねばならないのだ。今はもう出来ても僕は此處から逃げたくは無い。あの女の傍を離れる事は出来ない。僕の足は僕を運ぶのを欲しない。しかもそれであるて、僕の心は、はつきりとしてゐる。僕の心はあの女を憎んでゐるのだ。少くとも僕はあの女を憎んでゐると思つてゐる。何もかも、なんて恐ろしい事だ。それからあの、あの死んだ男！ あれを一體僕は何と斬断したらいいのだ？ あれは僕だつたではないか！ 叔父さん、僕は賣られて囚はれの身になつてゐたのだ。そしてあの女は自分の身の代金に僕の魂を取るだらう！」

その後で、私は初めて、自分もレオに劣らぬ様な苦しい位置に置かれてゐると言ふ事を、レオに告げた。すると

(これを私は言はざるを得ない)レオは、夢中になつて馬鹿の様にアツシヤに瀕れてゐるにも係はらず、さう言ふ私に同情して呉れるだけの常識は持つてゐた。多分彼は嫉妬を起すがものは無いと思つたのだらう。と言ふのはアツシヤの方で私を愛してゐる様なことは全々無いのを知つてゐるからだ。

私は言を進めて、逃走を企てようではないかと言つて見た。然しこの逃走の計畫は無駄だと言ふのですぐにやめにした。それに、正直正銘の所を言へば、たとへ何かの超自然力が不意に吾々に、此の陰氣な洞窟を逃げ出してケンブリツチへ戻れる様な機会を興へて呉れたとしても、吾々兩人がアツシヤの傍を實際に去る様なことは無かつたらうと私は信する。蠅が、自分の身をこがす燈火から離れる事が出来ぬのと同様に、吾々はアツシヤから去る事が出来なかつたのだ。吾々は監禁された阿片喫煙者の様なものであつた。理性の目ざめてゐる時は、自分達のやつてゐる事が如何に恐るべき事であるかをよく知つてゐるのだ。而も吾々には、その恐ろしい快樂を捨てる氣にはどうしてもなれないのだ。

二十二 さあ復讐をなさい!

朝食を了へると吾々は再び散歩に出た。そして數人のアマハツガー人が一廓の耕地に穀物を蒔いてゐるのを見た。其國でビールの原料となる穀物である。アマハツガー人は、種を蒔くのに聖書に書いてある通りの蒔き方をした。即ち一人の男が山羊の皮で作つた袋を自分の胸にくよりつけて、耕地を端から端へと歩きながら種子を撒くのだ。

此の恐ろしい連中の一人が、土地に種子を蒔くと言つた様な家庭的な氣持のよい仕事をしてゐるのを見て、吾々は少からずホツとした。何故ならば、これで此の連中も他の全人類とつながり合つてゐると言ふ氣がしたからだ。

歸りかけてゐるとピラリと逢つた。するとピラリは「何卒御用へ来て下さる様にと、女神が申されましたぞ」と報じた。そこで吾々は女神の居る所へと入つた。吾々の氣持には恐怖も無いではなかつた。と言ふのはアツシヤは普通の法則に對しては、たしかに例外だつたからだ。即ち、彼女と親密になつたと言ふ事は、情熱や奇異の思ひや恐怖の情を増させこそすれ、(事實増させた) 輕蔑の心を起させる様なことは斷じて無かつた。

いつもの通り吾々は壁に導かれて室に入つた。壁が去るとアツシヤは面覆をこつた。そして再びレオに自分を抱く様にと命じた。するとレオは前夜あれほど疑ひ苦しんだにも拘らず、言はれる通りにした。その挨拶の仕方は嚴格と言ふ以上に、いそいそと熱誠を込めたものであつた。

アツシヤは白い手をレオの頭に置いて、レオの眼を惚れぼれと見た。

「私のカリクラテス。あなたは自分が、何時になつたら私のことを「自分のもの」と呼ぶやうにおなりになるか疑つてゐらつしやるの? 又、何時になつたら私とあなたが眞實お互にお互のものになるかを疑つてゐらつしやるんですか? それは話してあげまじやう。先づ最初にあなただも私の様な身にならなければなりません。と言つても實は不死の身になるではありません。私は不死ではありませんからね。だけさ時と言ふものに胃されぬ様に武裝をして固めなければなりません。日光が水面からはね返る様に時の征矢が、あなたの力強、命の甲冑からはね返るやう。ね。だがそれでも私はあなたに結婚はしますまい。あなたと私とは違ふからです。私の命の明るさがあなた

の身を焼いて了つて、若しかするとあなたを亡ぼして了ひかねません。あなたには、私を見てゐる事だつて餘り永くは出来ません。餘り永いこと見てゐると、眼が痛んで、感覚がフラフラになつて了ひます。ですから（と言ひながら小さく點頭いて）私は直ぐ而覆を又かけます（ついでに言つて置くが而覆をかけると言つて置きながら、彼女は言つた様にはしなかつた。「いゝえ、御聞きなさい、あなたを耐えきれぬ目なんかには逢はせはしません。と言ふのは、ほんの今日の夕方、日没前一時間になつたら、私共は此處を出發します。そして萬事都合に行つて、私が道を忘れて了つてゐなかつたら、明日の夜は吾々は「生命」の場所立つてゐるでしょう。どうぞ道を忘れてゐればよいがと思つてゐます。其處であなたは火の洗禮を受けるのです。そして今迄何人も受けなかつた様な光輝を得て出て来るのです。カリクラテス、さうしたらあなたは、私のことを妻と呼んでいゝのです。そして私はあなたを夫と呼びます」

此の驚くべき言葉に答へて、レオは何事かを呟いた。何を呟いたか私には解らない。すると彼女は、レオの狼狽してゐる様を見てちよつと笑つた。そして言を續けた。

「あゝホリー、あなたもね。あなたにも此の恩典を授けてあげましょう。さうすれば、實際あなたは始終若くてゐられます。えゝ、あなたは私を喜ばして呉れたから、さうしてあげます、ホリー。」

「アツシヤ、有難う御座います」私は自分出来るだけの威厳をもつて答へた。然し、たとへあなたが今言つた様な場所があつて、その不思議な場所に火の様な効力のある、死が吾々を手で奪ひ取りに來た時にその死を拂ひのける事の出来る様な力が存在してゐるとしてもですねえ。私はそんなものなぞ欲しくはありません。アツシヤ、私に

とつては此の世は、いつまでも寝てゐたいと思ふ様な柔かな樂ではなかつたのです。此の土地と言ふのは石の様な心をした母です。そして此の母が自分の子供達に日々、糶として呉れるパンは石です。食べるものは石を食べられる。咽喉がかわくと苦味い水を飲まされる。軟かな子供を養育するのに管が加へられる。こんな人生を幾生涯も耐え忍ぶ事を誰が望むでしょう？ 失はれた昔の時や愛や、自分では滅す事の出来ぬ隣人の悲しみの記憶や、慰安を與へない智慧の重荷を、その様に脊に負はされる事を誰が欲するでしょう？ 死ぬと言ふ事は、それは辛い事です。何故と言へば人間のデリケートな肉體は、死んで了へば感ずる事の出来ない虫から食はれるのを恐がつて尻込みするからです。又、屍衣のために吾々には見えなくなる未知なるものを恐がるからです。然しいつまでも生きてゐる事は、死ぬよりも辛いだらうと私は思ひます。葉は緑色で美しいが、核心は死んで腐つてゐる。それに、あの死んだ人間を食ふ虫とは別な、眼に見えない記憶の虫が、始終魂を噛むのを感じながら、いつまでも生きてゐるのは、死ぬよりも辛いでしよう。

「ただどホリー、考へて見なさい」彼女は言つた。「無限の生命と體力と美は、人間に權力を與へますよ。それからあらゆる人間、取つて貴重なものや與へます」

「女王、ではその人間に取つて貴重なものと言ふのは一體何です？」私は答へた。「そんな物は皆泡ではありませんか？」

「いゝえホリー、愛と言ふものが有ります。愛はあらゆる物を美しくします。さうです、愛は私共の踏む塵にでも神性を吹込みます」

「それはさうかも知れませんが」私は答へた。「然し、若しもですね自分の愛人が一片の破れた産の様な者で、相手を刺すものと言ふ事が解つたり、愛されてもそれが無駄になつたりしたら、その時はどうなのですか？ 可憐だつて自分の悲しみを書くのは水の上に書けばそれでいいのです。だのにそれをわざわざ石に彫る人がゐるのでしょうか？ いや女神よ、私は自分の命だけを生きてゐて、世間の人並に歳を取つて、定められた通りに死んで、人々から忘れたいのです」

アツシヤは、聲の調子と話題を同時に變へて語り繼いだ。

「ところで私のカリクラテス、あなたはどうして此土地へ私を捜して来るようになったのです？ 私はまだそれを知らないのですから話して下さい。前夜あなたはあの——死んでゐたのをあなたも見た——カリクラテスの事を自分の先祖だと言ひましたね。さうしてさうなのですか？ 話して下さい。あなたは餘りお話しなさらないぢやありませんか？」

こう請はれてレオはあの箱と蓋に就ての不思議な話を語つた。祖先の埃及女アメンルタスが記録を書いて置いたその書片が、吾々をアツシヤの所へ導いた媒介物となつた事を話した。アツシヤは注意深く聴いてゐた。そしてレオが話し終ると私に向つて言つた。

「それ御覽なさいホリー、善と惡に就て歩きながら話した時一度私があなたに言つた事があるでしょう。さうあれは私の愛するカリクラテスが病氣が重くて臥つてゐた時でした。善から惡が生れて來、惡から善が生れて來る。種子を蒔く者はそれにどんな穀物が實るか知らないし、物を撃つ者は、その拳が何處に落ちるか知らないでゐる、と

私はあの時言ひましたつけえ。で御覽なさい、此のナイルの王族の娘の埃及女アメンルタスは私を憎んでゐました。私も憎んでゐます、現在だつて憎んでゐます。それはあの女が私に向つてかなり手剛く反抗したからです。それ御覽なさい、その女自身が、自分の戀人を私の腕に導いて來る案内者となつたぢやありませんか！ あの女が居たために私は自分の戀人を殺しました。それが今になれば見なさい、あの女が仲立となつて私の戀人は私の所に戻つて來たのです」

彼女は暫く沈黙した後で言葉を續けた。

「それで、あの女は自分の子供に、出來ればこの私を殺せと言ひ付けました。何故ならば私はその子供の父親を殺したからです。私のカリクラテス、あなたはその父親です。同様に或意味に於てはその子供なのです。であなたは、私があるあなたに對して犯した罪や、遠い昔に死んでしまつたあなたのお母さんに對して犯した罪の復讐を私にしたいと思ひますか？ 御覽なさい」そして彼女は膝を突いて白衣を開いて象牙の胸を出した。「御覽なさい私の心臓は此處に打つてゐます、あなたに小刀が附いてゐます。重くて長くて鋭くて悪い女を殺すには此の上も無い小刀です。さあそれを取つて復讐をなさい。グサリとおやりなさい、狙ひを誤たずグサリと刺しなさい！ さうすればあなたは満足するでしょうカリクラテス、そして幸福な人間として一生暮らせるでしょう。何故ならば、私の犯した罪に對して復讐をして、先祖の命令に従ふことになるからです」

レオは彼女を見詰めた。それから手を出してアツシヤを立上らせた。

「アツシヤ、立つて下さい」彼は悲しげに言つた。「僕があなたを殺せないのはあなたはよく知つてゐるのだ。さう

だ、ほんの昨晩あなたから殺されたウステーンのためにだつて僕はあなたを殺せない。僕はあなたの力の中に捕はれてゐる、奴隷に等しい者です。僕にどうしてあなたを殺す事が出来よう？ あなたを殺す位なら僕はその前に自分を殺します」

「カリクラテス、あなたはどうかやら私を愛し初めたのね」彼女は頬を赤らみながら答へた。

「では今度はあなたの國の事を話して下さい。あなたの國の人民はあのローマ帝國の様な國土を持つた大きな國民ですね、でしよう？ あなたは其の國へきつと御歸りになるでしよう、それがいいわ、私はあなたをコール國のこんな洞窟の中などに住ませ置きたくはありませんもの。いえ、一たんあなたが私と同じ様な身體になつたら、私は此處を去りましよう。路は私が見附けますから御心配無用ですわ。そしてあなたのその英國と言ふ國へ渡つて、私共に似合しい暮し方で暮しましよう。二千年間と言ふものは此のいやな洞窟だとか此處の陰氣な氣をした人々を見なくてすむ様になる日を持つてゐました。それが今はもう直きになりました。私の心はもう休日眼の前に控へた子供の心様に、跳ねとんでゐます。それは、あなたがその英國と言ふ國を治めるようになるから……」

「だが英國にはもう既に女王がゐらつしやるんですよ」レオが氣忙しくさへ切つた。

「それは何でもありません、女王なんか何でもありません」アツシヤは言つた。「その女王は王位から退けることが出来るではありませんか」

彼女の此の言葉で吾々は驚きの叫聲を放つた。そして、英國の女王を王位から退ける位なら、同時に吾々は自分の命を救出したいと思ふと言ふ事を説明した。

「だがそれはおかしい事ですわねえ」アツシヤは驚いて言つた。「女王をその國民が愛してゐるなんて！ これはたしかに、私がコール國に住む様になつてから世の中は變つて了つたのに違ひ無い」

再び吾々は、その變つたと言ふ王國の性質を説明した。そして、英人民を統治する帝王は、その廣い國土内のあるゆる正しい思想を持つた人々から敬愛されてゐると言ふ事を説明した。それから又、吾が國の實際の力と言ふものは國民の手中に在るもので、事實英國は下層の最も教育を受けない階級の選出議員に依つて治められてゐると言ふ事をもアツシヤに話した。

「あゝ」彼女は言つた。「民主主義ですね——では暴君が一人居る筈です。私はその民主主義をズツと以前に見た事があります。其處では人々は瞭然とした自分達の意志を持たないものだから、最後に一人の暴君を押し立て、その暴君を禮拜するのです」

「どうです」私は言つた。「吾々の國にも暴君はゐます」

「では」彼女は諦めた様に言つた。「とにかくその暴君を亡ぼす事は私共に来ますわ。そしてカリクラテスが英國を治めるのです」

私は直に、英國では「謀叛」はおいそれと言つて出来るなくさみ仕事ではないと言ふ事、それを企てたらどうしても罪はまぬがれぬ事、それから何事に依らずそれに類した企てはよく法律の網にかゝつて、大概絞首臺上に終りを告げるものだと言ふ事をアツシヤに言つて聞かせた。

「法律ですつて！」彼女は答める様な調子で笑つた——「法律ですつて！——ホリーあなたは私が法律以上の者だと

「言ふ事が解りませんか？ カリクラテスもその内に私同様になるでしょう。人間の法律なぞみんな私共に取つては北風が山に對すると同じ様になつて了ふでしょう。風が山を曲げますの、それとも山が風を曲げますの？」
「所で、もうどうぞ、彼方へ行つて下さい。カリクラテスあなたもさうぞ彼方へ行つて下さい。私は旅行の用意をしたいと思ひますから、あなた方も二人とも用意をなさらないやなりませんわ。それからあの下男にもさうさせない。然しあまり澤山着類を持つて来ない様になさいよ。と言ふのは私共が此處を留守にするのは二日間だけだと思ひますから。三日経つたら此處に戻つて来なければなりません。そして此のコールの墓地に永久の別れが出来る様な手段を構はしましょう。え、私の手を接吻なさつてようござんすとも！」
それでレオと私は其處を去つた。なにしろ私の方は今吾々の前に開かれた問題の恐るべき性質に深く考へ込みながら歩いた。恐ろしい女神は明かに英國に行く決心をしたのだ。彼女が英國に到着したら一體どんな結果になるだらうと思ふと私は戦慄した。

二十三 眞理の殿堂

「大冒険の用意は出来ましたか？」彼女は言つた。

「出来ました」私は答へた。「でもアツシヤ、私の方はそんな事を信じてはるませんよ」

「ホリー、ほんとにあなたは昔の猶太人の様ですわねえ。あの猶太人達の事を思ひ出すと私はほんとに怒りつぽく

るんですよ。物を信じないし、自分の知らぬ事を受容れるのは愚圖々々するしね。でも今にあなたも解ります。何故ならば彼處にある」と彼女は透明な水盤を指差して「鏡に照して見ると、道は普通りに矢張り開通してゐるので、ですからもう出發しましょう。そして新しい生活を始めませう。その新しい生活が何處で終りになるか解りはしませんけれど」

「そう、何處で終りになるか誰にも解りはしませんね」と私は鸚鵡返しに答へた。

そして吾々は中央の大洞窟の方へ歩いて行つて、外光の中へ出た。洞窟の口の所には霧籠が一丁待つてゐて、それには啞ばかりの六人の霧籠かきが附いてゐた。それと一緒に吾々の老友ピラリが居るのを見て私は氣がホツとした。ピラリに對しては私は一種の愛情を抱いてゐたのだ。

アツシヤは、自分自身以外の者は徒歩で行くのが一等いと考へたらしかつた。その理由を詳細に説明するの必要は無い。

吾々は約半時間ばかり、愉快な涼味を楽しみながら歩き續けた。毎日今頃になればコールの平野にはこの愉快な涼味が訪れるらしい。そしてこれは或程度迄は、陸の風も海風も無いのを償つてゐた——それと言ふのが此處では岩山の壁のために、あらゆる風がさえぎられてゐるのだ。その時、吾々の眼に、はつきりと數個の建築物の姿が見え出した。それはピラリの報ずるのによれば、大都會の廢墟だと言ふ。

まだウンと離れてゐる吾々の歩いてゐた所からでさへ、その廢墟が如何に素晴らしいものであるかを見る事が出来た。此事實は一步々々と前進するに従つてたしかなものになつた。此の都會を若しバビロンやテーベ其他のずつ

と古代の都なご比較したらさう大して大きくは無い。多分その外濶の面積は、十二平方マイル或ひはもう少し廣い位のものであらう。吾々が其處に到着して輒断し得た所では、昔の都會の外壁も大して高くは無かつたらしい。多分四十尺以上は無かつたものと思はれる。土地の陥落かそれとも他にそれに類する原因が有つたためか、所々現在まだ壊れて了つてゐない所が有つたが、その高さは四十尺ばかりあつた。

吾々が見た此の廢墟の光景の、莊嚴な美しさを、人に思ひ浮かばせるだけの力が私の筆にあればいゝがと私は思ふ。其處には落陽の赤い輝きを残りなく浴びて、圓柱が立つてゐる、寺院がある、神殿がある、王宮がある。それが所々に緑の林を點在させて何マイルも何マイルも續いてゐるのだ。勿論これらの建物の屋根はとうの昔に廢れて無くなつてゐる。がしかし、その石造建築法がきはめてドツシリとして、使用してある岩石の堅牢さと耐久性のために、隔ての壁や大圓柱の大部分は今尚立つたままになつてゐる。

吾々の前方には一條の道路がズツと向ふへ開けてゐた。あきらかにそれは昔の此の都會の本通りだつたのだ。何故ならば此の道路は非常に廣くして規律正しく出来てゐる。——テムズ河の河岸通りよりも廣い。後で發見した事であるが、此の道路には壁に使つてある様な化粧岩の塊が敷きつめてあるので、と言ふよりは化粧岩の塊で築いてあるので、現在でさへもその上には草や落葉などは餘り生えてゐない。根を下せるやうな深い土が無いのだ。反對に昔公園や庭園であつた所は深い森林になつてゐた。實際遠い所からでも、容易にいろんな道路の跡を眼でたどる事が出来た。それは、路上に生えてゐる育ちの悪い雑草の、火に燃えた様な様子を見るとすぐ解るのだ。

此の大道路の兩側には巨大な廢墟の塊が在つた。その一つ一つの塊の間には空地が在つて、隣とは離れてゐる。

その空地は私が思ふに昔は庭園地だつたらしい、だが今では深いゴミゴミした藪になつてゐる。廢墟になつてゐる家は皆、同じ色の石で造られてゐて、大概數本の柱がついてゐる。本通りを急いで通りながら、消えかゝつた日の光で見る事の出来る範圍内では、數千年來その石の柱を踏んだ人の足は一つも無かつたらしい。と言つても間違つてゐないと私は信ずる。

間もなく吾々は巨大な廢墟の所へ來た。此廢墟の面積は少くとも八エーカーはあつた。吾々は之を寺院だらうと思つたが、其推察は當つてゐた。内部はいくつもの廣間に分れてゐて、其一區劃々々に又それよりも小さな廣間がある。そして集の様になつた支那式の座席の様式になつて、之等の廣間は並んで立てゐる大圓柱でしきられてゐた。

「カリクラテス、人の眠れる様な部屋が」とアツシヤはレオに向つて言つた。レオは彼女が、獨龍から降りるのに手を貸しに行つてゐたのだ。此處に一つあります。二千年前、あなたとあの埃及の毒蛇とがその部屋で休んだのですよ。然しあれ以來私は此處に足踏みをしませんでした。若しかするとあの部屋は壊れたかもしれませぬわ」

そこで、彼女は吾々全部を従へて、外の圓へ通する壊れた階段を昇つて行つた。そして暗い所を見廻した。直ぐに彼女は思ひ出した様な顔付きをした。そして、壁に添つて二足三歩歩みながら立俤つた。

「此處は昔の通りだ」アツシヤは、食料品や二三の荷物を擔いでゐる二人の壁の前に進む様に手を振りながら言つた。その壁に依つてランプがともされるや、吾々はその室に入つた。アツシヤが立俤つてゐたのはその室の前だつた。それは壁の厚い部分にくりぬかれた小室である事が分つた。その内部にドツシリとしたテーブルが在つたりする事實を以てすれば、昔此の室は多分此の大寺院の一門番の居間としてゐたものだと思はれた。

此處で吾々は夜警をした。そして望合と暗さの許すかぎり、室内をサツパリと居心地よくなした後で、そこぼくの冷肉を喰べた。——とにかくレオとヨブと私は冷肉を喰べた。と言ふのは、私は他でも言つたと思ふが、アツシヤは麥粉菓子と果實と水以外の食物には決して手を觸れなかつたのだ。吾々がまだ食事をしてゐる時、満月が山脈の壁の上方に昇つて、銀の様な月光をあたり一面に注ぎかけた。

「ホリー、私が何故あなた方を今夜此處へ連れて来たかあなたに解りますか？」アツシヤは言つた。さう言ふ彼女は頬杖を突きながら、空の女王の様な月輪が此の寺院の荘嚴な柱の上へ昇るのを見詰めてゐた。

「私はあなた方を連れて来ました。その譯は——さう、それは變ではありません、だがあなたに解りますかしら、カリクラテス？ あなたが今城に坐つてゐる場所は、ずつと昔私があるの死骸をコールの洞窟へ持ち歸つた時、あなたの死骸が寝た所ですよ。あの時の有様が又私の心に湧き上つて来ます。私はそれを見る事が出来ます。見てゐると恐ろしい！」

そして彼女は戦慄した。

さう言はれてレオは急いで飛び上つて、坐つてゐる場所を變へた。過去の思ひ出がアツシヤをひどく動かしたのはとにかくとして、レオに對してはそれは明かにあまりありがたいことではなかつたのだ。

アツシヤは直ぐに言葉を續けた。

「私はあなたに、未だ會て人間が見た事の無い素晴らしい景色を——此のコールの廢墟に満月が照るのを見せてあげたくて連れて来たのです。御飯がすんだら——實はねカリクラテス、私はあなたに果實の外は何も喰べない様に

敬へてあげたかつたのですけれど、それはあなたが火の洗禮を受けてからの事です。私もね會ては畜生の様に肉類を喰べてゐた事があるのです。であなた御飯が済んだら外へ出ようぢやありませんか。そして此の大寺院や、此の寺の人々が昔祭つてゐた神様を御覽に入れましよう」

無論吾々は直に身を起して外へ出た。

此處で再び私の筆はつまづく。たとへ私にそれを描くだけの筆力があるとしても、此の寺院のいろいろな圖の寸法や細部のことをメラリと書けば、たゞもう退屈なばかりだらう。而も私は、吾々が見た所のものを如何に描寫すべきかを知らないのだ。それは廢墟でありながら實に莊嚴なものであつた。その莊嚴さは實に人の思ひ及ばぬ程のものであつた。廣間の向ふに又別の廣間がおぼろに見える。大きな柱の列がいくつもいくつもつながつてゐる。その柱の中の五六本には、特に門の傍に立つてゐるものには、根元の所から頂上迄彫刻がしてある。ガランドウの部屋々々が次々に並んでゐる。それらの空虚な部屋々々は、如何なる雜沓の町よりも更に雄辯に人間の想像力に訴へる。そしてこれら總ての上に、死の沈黙、完全な寂寥感、思ひ惱んでゐる過去の靈が響がつてゐる！ 此の光景の美しさは實に何とも言へない、而も何と言ふ荒涼とした景色だらう！

吾々は聲高に話そうとはしなかつた。アツシヤその人でさえも此の古跡の前では畏縮してゐた。彼女の生命の長さをも以てしても、此の古跡の古さに較べれば一瑣事に過ぎないのだ。吾々は囁きを交すのみであつた。而も其囁きは圓柱から圓柱へと響き渡つて、靜かな空氣の中に消えて行つた。月光はあかあかと柱や廣間や壁をかゝつた壁を照して、銀色の着物で裂目や破損の箇所を隠してゐた。そして廢墟の白い莊嚴さに、異常な夜の美を青せてゐた。

吾々は、此の景色をいつまでも見詰めてゐた。どれ位の時間見詰めてゐたか知らない。その後でアツシヤが言った。

「いらつしやい、私が石で出来た美の花、これ以上不思議なものはないと言ふものを見せてあげましょう。若しただあれが立つてゐるんでしたら。あの美しさにかゝれば時なんぞ何でもありません。男があれを見るとその男の心は、面覆の後にある顔を見たい願望で一杯になります」

さう言ふと彼女は返事を待たずに、吾々を導いて、柱のある廣間を二つ通つて、此の古寺の内殿に入つた。その一番内部の廣間は約五十ヤード四方もあるであらう。その中央の所に、吾々と面と向き合つて立つてゐるものがある。これこそ多分、昔より今に至る迄の世の天才藝術家が此の世に寄與した美術品中、最も莊大な寓意的な作品だ。と言ふのは、此の廣間の真只中の四角な厚い岩の板の上に、一個の巨大な暗色石の球が置かれてある。その直径約二十尺。そしてその石の球の上には、巨大な一人の翼のある美人の像が立つてゐる。丁度柔かな月光に照されて、影の着いてゐるその像の幻惑する様に美しく崇高なことを言つたら、私は一目それを見ると呼吸が停つて、私の心臓がしばし鼓動を止めた位であつた。

「あれは誰ですか？」その像から眼を離す事が出来ると直ぐに私は訊ねた。

「ホリー、あてる事が出来ませんか？」アツシヤが答へた。「それぢやあなたの想像力は何處にあるんです？ あれはね「地球の上に立つてゐる真理」ですよ。自分の面覆を取らせようと思つて、人間を呼んでゐるのです。臺の上に書いてある事を御覽なさい。この文章はたしかにコールの人民の聖書から抜萃されたものです」

と言つて彼女は立像の足元へ連れて行つた。其處には普通の支那風の象形文字の文句が刻まれてあつた。ウンと深く刻んであるのでまだハッキリとしてゐる。少くともアツシヤにはハッキリと讀めた。彼女の翻譯して聞かせる所に依ると次の様である。

「わが顔はまことに美しきを、わが面覆を取りて、わが顔を見んと欲する人は無きか？ われはわが面覆を取る人のものとならん。而してその人に平穩と、知識と善事の美しき子を與へん」

聲ありて叫ぶ。「汝を求むる者は、汝を得んとす。されど見よ！ 汝は處女なり。又汝は世の終りまで處女たるべし。女より生れたる人にして、汝の面覆を取りて命ある者は無し。未來にも無かるべし。死を以てしてのみ汝の面覆は取り得べきなり、お、真理よ！」

かくて真理は兩の腕を差伸ばし、哭きぬ。何となれば真理を得んとする人は、真理を得る事能はず、又真理の顔をまともに見る事能はざればなり。

「解つたでしょう」アツシヤは翻譯し了ると言つた。「真理は此のコール人の女神だつたのです。そして真理の女神のためにコール人は宮を建て、真理を求めたのです。コール人は真理を發見する事は出来ぬことを知つてゐました。それでゐて真理を求めたのです」

「それは」私は悲しげに附け加へた。「現在に至るまで人間は真理を求めてゐます。然し見出せずにあります。そして此の聖書の文句が言つてゐる様に、未來にも真理が發見出来る様なことはありません。と言ふのは、死ななければ真理は發見出来ないのですからね。」

二十四 板橋を渡る

次の朝、夜明け前に其處を出發して、途中ほんのちよつと朝食を喰べるために停つたが、その後で再びドンドン威勢よく前進した。そのためにその日の午後二時頃には、巨大な岩壁の下に到着した。此の岩壁は噴火山の縁になつてゐる。吾々がたざり着いた箇所は特にけわしく聳え立つてゐて、その高さ千五百尺或は二千尺位あつた。一行は此處で停つた。でも別に私は驚きなんぞしなかつた。何故ならば之以上前進は出来ぬものだと思つてゐたからだ。アツシヤは繩籠を降りながら言つた。

「さあ、私共の仕事はこれから始まる様なものですよ。それは此の下男共と此處で分れてこれからは私共ばかりで進まねばならぬからです。」さう言つてからアツシヤはピラリに向つて附け加へた。「お前と此の奴共は此處に居残つてゐて、私共の歸りを待つてゐるのだよ。明日の正午頃は戻つて来る。若し戻つて来なければ待つておいで。」ピラリは恭しく頭を下げた。そして、「たとへ皆が老人になる迄御歸りが無いとしても尊い御命令通りにいたします」と言つた。

彼女はヨブを指差しながら言つた。

「ホリー、此の男も後に停つてゐる方がいゝわ。何故なら心高く、勇気が大きくないようだと、若しかすると何か悪い事が起つて身を亡ぼすことになるかも知れませんからね。それから又私共が、これから行く所にあるいろいろ

の秘密は普通人の眼には適はしくないので」

私はこれをヨブに翻譯して言つてきかされた。するとヨブは直ぐに、此處に自分を踐して置いて呉れない様にと、涙を流さんばかりに熱心に歎願した。彼は言つた。「私は今迄に随分恐ろしい目に逢つたんですから、これ以上恐ろしい事を見る事はありません。此のだんまりの奴等と一緒に一人で後に残つてゐるなんて考へて見ただけでも恐ろしくて死んで了ひそうな氣がします。此奴等は若しかすると私にあの焼けた壺を乗せかねませんからね。」私はヨブの言葉をアツシヤに翻譯して聞かされた。すると彼女は肩をすくめてから言つた。

「では、來させなさい、私には何でもありませんから、勝手にさせなさい。ランプとそれからこれを持つて來て貰ひませう。」そして彼女は一枚の板を指差した。その板は長さ十六尺ばかりあつて、それまでは、彼女の繩籠の長い擔棒の上にくり附けてあつたものだ。私は之はカーテンを廣く擴げるために附けてあるものだと思つてゐた。然し、今になつて見ると、今吾々がやらうとしてゐる不可思議な計畫と關係のある何か不可解な目的に使ふ板であつたのだ。此の板は丈夫で彈力があつたけれども大層輕かつた。

そこで此の板と一つのランプがヨブに與へられて、ヨブがこれを運ぶことになつた。私は他の一つのランプを、用意の油壺と共に背中にぶら下げた。一方レオは食料品や小山羊の皮の中に若干の水を入れたのを身に附けた。これが出來上つて了ふと女神はピラリと六人の繩籠かき達に其處から百ヤードばかり離れてゐる花の咲いてゐる木邊の小藪の後へ退いて吾々の姿が見えなくなるまでどんなことがあつても其處にゐる様にと命じた。彼等は恭しく頭を下げて去つて行つた。老ピラリは去る時に、私の手を心安げに握りながら囁いた。「女神と一緒に此の不思議な

冒険に行くのがわしでなくてあんたであつてよかつたわい。」その説には私も賛成しなくなつた。間もなく彼等は去つてしまつた。するとアツシヤは、皆用意は出来ましたかと簡単に訊ねてから、身をめぐらして、攀えてゐる断崖を見上げた。

「おやおや、レオ」私は言つた。「まさか此の絶壁をよち昇らうと言ふんぢやないだらうね！」

半ば恍惚と、半ば神秘を豫期してゐる様な状態に在るレオは、肩をヒヨイとすくめた。すると丁度その時アツシヤは不意に跳上つて断崖をよち昇り始めた。で勿論吾々もそれに續かなければならなかつた。彼女が安々と優美な體附きで岩から岩へと飛んで崖に添つて身を揺りながら昇つて行くのを見るのは、殆ど驚きであつた。だが昇るのは思つた程困難ではなかつた。それでも後を振り返るといやあな氣になる様な危い所も一二箇所通つた。案外大して困難でなかつた、と言ふのは、此邊はまだ岩に傾斜があつて、上方の様に全くの絶壁ではなかつたためだ。

只厄介なしろものはヨブの持つてゐる板だつたが、それ以外には大して苦しい目もせず昇つた。こんな風にして、吾々四人は最初立つてゐた所から約五十尺位の高度迄昇つて来た。それだけの高さを昇りながら吾々は同時に出發點から左方約六七十歩横に來てゐた。何故ならば吾々は壁の歩く様に斜に昇つたからだ。直ぐに吾々は一つの崖に着いた。この崖は最初はかなり狭かつたが、段々行く内に廣くなつて、更に内側に向つて傾斜をしてゐる。その様は丁度花の花盤に似てゐる。で吾々は次第々々に一種車輪の轆の様な所に、又は岩の繼目の様な所に沈んで行つた。此の岩の繼目は次第々々に深くなつて行つて、しまひにはデボンシヤイヤーの露路を石で作つたものゝ様になつた。たとへ崖の下の傾斜から見詰めてゐる人が居るとしても吾々は今は全く見えなくなつた。此の露路は自然に

出來た物の様だ。これが約三四十ヤード續いてゐる。三四十ヤード行くと突然洞窟になつてゐる、この洞窟は自然に出來たものらしく、露路とは直角に交つてゐる。

此の洞窟の入口でアツシヤは立停つた。そして二個のランプに灯をともし様に命じた。私は灯をともした。一つの方を彼女に渡し、他の一つを自分で持つた。するとアツシヤは先導となつて洞窟の中を進んだ。非常に注意しながらソロソロ歩いた。實際床が非常に不規則になつてゐるので、さうする必要があつたのだ。——河床の様に圓い岩塊がゴロゴロしてゐる。所々に深い穴が掘つてある。その穴に落ち込みでもしたらそれこそ手か足を折るかねない。

此の洞窟を吾々は二十分以上も進んで行つた。どれ位の距離を進んだかを判断するのは、路が無数に曲りくねつてゐるために容易ではなかつた。が私に判断出来る限りでは約一マイルの四分の一位も進んだ。

だが終に洞窟の一番奥の所で吾々は立停つた。所が私以外の薄明りに眼を馴らそうとしてゐる間に、強い一陣の風が吹いて來て、二個のランプを吹き消してしまつた。アツシヤが聲をあげて吾々を呼んだ。と言ふのはその時彼女は吾々の少し前の方に居たのだ。で、吾々三人は彼女の所に這つて行つた。すると吾々の眼前に實に陰鬱な莊大な恐ろしい光景が展開した。吾々の前には黒い岩の中に一つの大きな淵がある。遠い昔、大自然の何か恐ろしい連環のために穴が出來て、岩が滅茶苦茶に壊れたのだ。丁度何度も何度も落雷に打たれたものゝ様であつた。その時は向ふ側の断崖は見えなかつた。が断崖に覆まれてゐる此の淵はその幅を測る事が出来るに違ひない。が黒い色をしてゐる事から推すと大して廣くは無いらしい。淵の輪廓や、何處迄續いてゐるかと言ふ事などを見分ける事は不

可能であつた。何故と言ふと、極く單純な理由からだ。即ち吾々四人の立つてゐる地點は、此の斷崖の頂上の面から非常に下方になつてゐる。少くとも千五百尺か二千尺は下方に在るのだ。それで上方から落ちて來る日光は非常に微なのだ。吾々が通つて來た洞窟の出口は、非常に不思議な巨大な獸爪の様な格好の岩で、約五十ヤードばかりも前方の深淵の中空へ突出してゐる。その突端は鋭く尖つてゐる。其形は、鶏の脚の獸爪に實にそっくり似てゐる。外にこれ程よく似てゐるものは考へることは出來ない位だ。此の巨大な獸爪は根元だけがその親の岩壁にくつ附いてゐる。その根元と言ふのは言ふまでも無く恐ろしく大きい。丁度、鶏の獸爪が脚にくつ附いてゐる様にそっくりだ。根元の外はこの突出してゐる岩は全々何の支へも無かつた。

「私共は此處を渡らねばなりません」アツシヤが言つた。「眼を廻さぬ様に注意をするんですよ。それから風に吹きとばされて下の淵に墜落されぬ様に氣をつけなさい。ほんとに此の淵には底がありませんからね」

そしてそれ以上吾々三人に恐怖を起させるだけの時間を與へないで、彼女は獸爪の様な岩の上を前方へ歩き出した。吾々三人のことはほつたらかして歩き出した。出來るだけ彼女の後に従つて來いと言ふのだ。私がアツシヤの次に歩いた。それからヨブが苦しうに持たされた板を引きつづつて來る。レオはしんがりを務めた。此の物おぢをしない女が、恐れる氣色も無く、恐ろしい所をしづしづと歩いて行くのは實に素晴らしい觀物だつた。私の方は、ほんの二三歩踏み出したばかりで、空氣の壓力と、一度滑つたらどうなるだらうと思ふ恐ろしい考へのために四這ひになつて這つて行かねばならなくなつた。すると後の二人も私になつた。

だがアツシヤはそんな氣の弱い要心なんかしなかつた。ドンドン彼女は前進した。突風に向つて自分の身體を傾けながら。そして眼を廻して頭を調子を失ふ様子も無ければ、平均を失ふ様子も無かつた。

間もなく吾々は此の恐ろしい橋を二十歩ばかりも渡つた。橋は一足ごとに狭くなつて來る。するとその時不意に峽口に添つて大突風が吹き起つた。私はアツシヤがその突風に向つて身を傾けたのを見た。然し強風は彼女の黒の外套の下まで吹き通つて、彼女からその黒の外套をはぎ取つてしまつた。外套は傷を受けた鳥の様にバタバタとはためきながら下の方へ飛んで行つた。それが落ちて行つて終に闇黒の中に消え去るのを見てゐると恐ろしい氣がした。

私は岩の鞍にしがみ附いた。そして四邊を見廻した。吾々の下では巨大な岩の獸爪が生物の様にブンブン叫びながら振動してゐる。此の光景は實に恐ろしかつた。吾々は天と地との間の薄暗がりの中にぶら下つてゐるのだ。吾々の下方には何百尺となく虚空が擴がつてゐて、下になるに従つて暗くなり、最後は全くの暗黒になつてゐる。その底がどれ位の深さがあるのか私には解らなかつた。上方には眼もくらむ様な虚空が無限に續いてゐる。そしてはるかに遠い所に一條の靑空が見える。

「おゝ、おゝ」吾々の前方の白い姿は叫んだ。アツシヤは今外套を風に取りられてしまつてゐるので白衣の姿になつてゐるのだ。その白い姿は女と言ふよりも飛に漂ふてゐる人魂の様に見えた。「進むのです。でないと落ちて粉塵塵になつてしまひますよ。地上を見詰めて、岩にしつかりとつかまりなさい」

吾々は彼女の言ふまゝにした。そして振動してゐる道の上をやつとこさ這つて進んだ。風はこれに向つておめき叫びながら吹きつける。道はユラユラ揺れる。そのために此の岩の道は、何か巨大な肉叉が音を立てゝでもゐるか

の様に小さな響を立てた。吾々は前へ前へと進んだ。どれ位の間進んだか私は知らない。唯、どうしても必要な時だけに時たま周囲を見廻すだけであつた。最後に、吾々は鼠爪の様な岩の先端に到着したのを知つた。其處は岩の板になつてゐる。だが普通のテーブルより少し大きい板だ。此の岩の板はブルブル顫えたり、はね上つたりしてゐる。それが丁度機關の力の強過ぎる汽船みた様だ。其處に吾々は岩にしがみ付き、四邊を見廻しながら身を伏せてゐた。その間もアツシヤは、下に口を開いてゐる恐ろしい深淵をまるで怖がる氣色もなく、再び風に向つて突立つた。そして前方を指差した。彼女の長い髪の毛は下方に垂れた。彼女に指差されて、ヨブと私があれ程骨を折つて運んで来た狭い板が何のために用意されて来たか解つた。前面には一物も無い虚空が大口を開いてゐる。向ふ側には何かと在る。がまだそれが何であるか見えない。と言ふのは此處は暗がりか暗くて、まるで雲の多い夜の闇の様だつた。それは向ふ側の斷崖の影のためか、或は何かその他の原因のためである。

「暫らくの間待たなければなりません」アツシヤは大きな聲で言つた。直ぐに光が來ますからね」

彼女の此の言葉が何の事だか、その時は想像する事が出来なかつた。此の恐るべき場所へ一體これ以上光がさすような事が有り得るだらうか？ さう思つて私が尙も怪しんでゐる間に、突然恰も火焰の巨刀の様に、落陽の光線が此の地獄の暗闇を刺し貫いた。そして吾々が身を伏せてゐる岩の先端をカツと照した。その光線は、此の世の物では無い様に輝いてアツシヤの美しい姿を照し出した。私は、此の刀の様な陽光の荒々しい不思議な美しさを描寫する事が出来ればよいと思ふのみである。この光の刀は暗闇を横切つて深淵の霧の輪を貫き通つた。どうして落陽の光線が其處へさして來たのか私は今に知らない。然し察する所、反對側の崖に裂目があつたか穴があつたかだら

う。落陽が丁度それと一直線上に來た時に、その穴か裂目から日の光が流れ込んだのだ。

「早く、アツシヤが言つた。その板を。この光かさしてゐる間に渡らなければなりません。光は直ぐに消えてしまひます」

「おやおや、旦那様！ まさかこいつの上に乗つかつて、此の此處を渡らせようと此の方は仰有るんぢやないでしようね」ヨブはこゝろ言つて呻いた。私の命ずるまゝに例の長い板を私の方へ差出しながら。

「いやその積りだぜ、ヨブ」私は強てはしやぎながら大聲で叫んだ。だが此の板の上を歩くことを考へると、ヨブ同様私も氣持はよくなかつた。

私は板をアツシヤに手渡した。アツシヤはそれを巧に濺に濺渡した。で板の一方の端は揺れてゐる岩の上に乗つた。他の一方の端は振動してゐる岩の鼠爪の先端に残つた。その後で彼女は板が風に吹きとばされぬ様に片足で踏みながら、私の方へ振向いた。そして聲を擧げた。

「ホリー、私が此の前來た時から見れば、動いてゐる岩を支へてゐる物がいくらかゆるんでゐます。だから果して私共の身體の重味を耐えきれぬかどうか、確なことは解りません。だから私が最初に渡ります。私はどんな事があつても大丈夫ですからね」

さう言ふと、それ以上愚圖々々してゐないで彼女は此の危なかつかしい橋を輕々と、然ししつかりとした足取で踏んで渡つた。そして次の瞬間には揺れてゐる向ふ側の岩の上に達してゐた。

「大丈夫です」彼女は呼んだ。「それ、板を握むんです！ 私が岩の反対側の端に立つてゐて、私より重いあなたの

「重くてもひつくり返らぬ様にして居ましょう。さあ来るんです、ホリー。日の光はもう直ぐに消えてしまひますから」

私は立上らうとして落した。私が自分の一生の中に心から恐怖を感じた事が有つたとしたら、それは此の時だつたのだ。實際、私はその時躊躇してすくんでしまつたと言ふ事を恥としない。

「あなたはまさか怖がつてゐるんぢやないでしょうね」此の不思議な女は突風の風いだ中に、揺れてゐる岩の一番高い所に鳥の様にとまつて其處から叫んだ。「では、道を開けてカリクラテスを通しなさい」

此の言葉で私の心は決した。こんな女から嘲笑されるよりも断崖から墜落して死ぬ方がまだましだ。で私は歯を喰ひしばつた。そして次の瞬間には私はその狭いたわんでゐる板の上に居た。下や周囲は底の無い虚空である。私は平常ウンと高い所は嫌ひな男だつた。だが高い所に身を置いてどれ程恐ろしいかをしみじみ味はつた事は今迄無かつた。あゝ、そのたわんでゐる板が二つの動いてゐる支物に乗つてゐると言ふいやあな感じ。私は眼まひがして来た。そしてこれは落ちるに違ひないと思つた。私の脊骨はすくんだ。落ちつゝある様な気がした。で。波のうねりに浮いた小船の様に上下にゆれてゐる岩の上に倒れた自分自身を見出した時の喜びは言葉では言ひ現はせない。唯知つてゐる事は、私が、簡単にだけれども熱心に、自分の身を守護して貰つた事に對して神助に感謝したことだけだ。

今度はレオの番が来た。レオの顔色は青くはなつてゐるが、綱渡りの様に走つて渡つた。アツシヤは手を突出してレオの手を握んだ。そしてこう言ふのが聞えた。

「よくなさいましたわ、よくなさいました！ 昔の希臘人の血がまだあなたの身體の中に生きてゐるのです！」

それで最早淵の向ふ側に残つてゐる者は可哀相にヨブだけになつてしまつた。彼は板の所まで這つて来て大聲を張り上げた。「旦那様、私には出来ません。あのおつそろしい所へ落つちて了ひます」

「渡らなきやいけない」私は御所柄もわきまへずに飄々な調子でこう言つたのを記憶してゐる。「渡らなきやいけないよ、ヨブ。何でも無いんだ。まるで繩をつかまへる様なもんだ」

「出来ません、旦那様。ほんとに私には出来ません」

「あの男を渡らせなさい、でないと彼處にゐたら死んで了ふばかりですよ。それ日の光は消えかゝつてゐる！ もうほんのちよつとで消えて了ひます」アツシヤは言ふ。

私は見た。彼女の言ふ事は眞實だ。太陽は次第に沈んで、吾々の所に達してゐるその光線の通つて来る崖の穴か裂目の縁以下にならうとしてゐる。

「ヨブ、若しお前が其處に止まつてゐたら、たつた一人で死んで了ふぞ」私は怒鳴つた。「光は消えかゝつてゐるんだ」

「さあ、男らしく元氣を出さんだ、ヨブ。何でも無いんだ」レオが叫んだ。

「神様、御助けなすつて下さい」暗黒の中から可哀相なヨブが叫んだ。「あゝ、板が滑り落ちようとしてゐる！」そして私は激しくヨブが薬換いてゐる音を聞いた。で私はヨブはもう墜落したものと思つた。

然しその瞬間にヨブの突出した手が薬掻き苦しんで空中を舞ひ回してゐたのが、私の手にかち合つた。それで私は

それを引張つた。あゝ實に私は自分の全力を込めて必死になつて引張つた。有難い事には私には非常な力があつたのだ。すると次の瞬間にはヨブは喘ぎながら私の側の岩の上に居た。私は悦しかつた。然しあの板は！ 私はそれが滑るのを感じた。そして突出してゐる岩の瘤にぶつゝかる音を聞いた。それから板は落ちてしまつた。

「しまつたー」私は叫んだ。「歸る時にはどうして渡るんだ？」

「僕は知らない」暗い所からレオが答へた。「今日は厄日だ。此處に來られたのがまあ有難いやうなものだ」

然しアツシヤは唯、私に向つて自分の手を取つて従つて來る様に命じたのみであつた。

二十五 生の靈

私は命ぜられるまゝにした。そして恐ろしくて戰きながら岩の端の上を連れて行かれてゐる事を感じた。私は足を前に突出した。が足に觸れるものは何も無かつた。

「私は落ちかけてゐるー」私は喘いだ。

「では落ちなさい、そして私に委せて置きなさい」とアツシヤが答へた。

「落ちるのですー」彼女は再び叫んだ。

他にしようが無いので私は落ちた。

私は岩の傾斜面を二三步自分の身體が滑つたのを感じた。その後で今度は空中に落ちた。これはもう自分は死ぬんだと言ふ考へが私の頭腦にひらめいた。然しさうでは無かつたのである！ 次の瞬間に私の足は岩の地盤に突きあたつた。そして自分は何か固い物の上に立つてゐる事を知つた。此處迄は風もとどかない。上方で叫聲を立てながら吹いてゐる風の音を聞く事が出来る。私が今迄の小さな天恵を神に感謝しながら其處に立つてゐると、物の滑り落ちるガラガラ言ふ音がして、私の側の所にレオが落ちて來た。

「やあ叔父さんー」彼は叫んだ。「其處に居るんですか？ どうです面白いぢやありませんか？」

丁度その時、恐ろしくわめき叫びながらヨブが吾々のすぐ上に到着した。そして私とレオにいやと言ふ程衝突したので二人はぶつ倒れた。吾々三人がやつとこさ起直つた時には、アツシヤは吾々の中に立つてゐた。ランプと用意の油壺とは幸にして破損しなかつた。彼女はそのランプに灯をつける様に命じた。

私は自分の蠟マツチの箱を見つけた。で磨るとマツチは此の恐ろしい場所でも、ロンドンの客間と同様に威勢よく燃えた。

「これで安全に來ましたー」女神は言つた。「だが一度は私あの揺れてゐる岩があなた方と一緒に落ちて、下の方の底のない深淵にあなた方を振落しはせぬかと気が氣ではありませんでした。何故ならば、あの向ふの裂目は地球の核心まで届いてゐると私は信じてゐるからです。そしてあの圓い大岩の乗つてゐる岩は、上の大岩が揺れる重さのために壊れてゐるのです。此の男のことを」と言ひながら地盤に坐つて赤い木綿のポケットハンカチーフで弱々しく額を拭いてゐるヨブの方を見てうなづきなから、「此の男のことを脈とは上手に言つたものです。實際脈の機に馬

鹿ですからねえ。所で此の甲があの板を落して了つたので、歸りに此の淵を渡るのは容易ではありません。ですからそのためには私が何とか工夫をしなければなりません。暫く休んで、此處をよく御覽なさい。此處は何だとあなたは思ひますか？」

「何とも言へませんねえ」と私は答へた。

「ホリー、曾て一人の男が此の空中の巢の様な場所を毎日の自分の住居に選んだと私が言つたら、あなたは信じますか？ その男は此處に何年も住んでゐたのですよ。唯十二日置きに一日宛食物や水や油を求めに此處を離れました。食物や水や油は自分で運べない位に澤山に、人々がその男への捧げ物としてあのトンネルの入口に置いて行つたのです。私達が此處へ来るのにさつき通つて来たあのトンネルです」

私は不審な顔付をして彼女を見詰めた。すると彼女は言葉を續けた。

「でもさうだつたのですよ。一人の男が居たのです。ヌート、と自分の事を言つてゐました。その男はコール帝國よりも後世に生きてゐた者ですが、コール人の智識を持つてゐました。仙人で哲學者で、自然の神祕にそれは通じてゐました。私がこれからあなたの方に見せやうと言ふ「火」はその人が発見したのです。その「火」は大自然の血でもあり生命でもあります。そしてその「火」の中に浴して、それを呼吸した者は、自然が生きてゐる間生きて居れます。だけど其ヌートと言ふ人は、ホリーあなたと同様に自分の智識を實際に使はうとはしなかつたのです。人間と言ふものは死ぬ様に生れつたのだから、何時迄も生きてゐるのはいけない、とヌートは言ひました。それで彼は自分の知つてゐる秘密を誰にも話しませんでした。そしてそのために此處に、生命を求め捜す人が通らなければならぬ此の場所に住んで、アマハツガー人からは神聖な隠者として崇められてゐたのです。

「で、私が此の國に初めてやつて来た時に——カリクラテス、あなたは私がどうして此の國に來たか知つてゐますか？ それは又今度話しましょう、それは不思議な話です。で、私が初めて此の國にやつて来た時に、私はその哲學者の噂を聞きました。そしてその人が食物を求めに向ふに行つた時に働いて仕へて用を足してやりました。そしてその隱者と一緒に此處に來たのです。あの淵を渡るのは大變恐ろしかつたのですけれど、それから私は自分の美しさと観察でその人をすかしました。そしてその人の氣に入る様な事を言ひました。するとヌートは私を「火」のある所へ連れて行つて、「火」の秘密を私に語つて呉れたのです。然し彼は私を其の火の中に入れて苦しませたがりませんでした。それから私の方も若しかすると殺されるかも知れぬと思つたし、又その人が非常な老人でもう直ぐ死ぬに違ひないことを知つてゐたので火の中に入ることは控へました。カリクラテス、私があなたに逢つたのは、それからほんの二三日後だつたのです。あなたはあの美しい埃及女のアナメルタスと共に其處へ彷徨ふて來たのです。そして私は一生一度最初の最後に人を愛すると言ふ事を知りました。それで私はあなたと一緒に「火」の所に來て二人共生命の賜物を受けようと思ひ附いたのです。そこで私達は此處へ來ました。埃及女も後に残つてゐるやうにしてないで一緒に來て来ました。すると、どうでしょう！ 老人のヌートが最近に死んだまゝ身を横たへてゐるではありませんか。ヌートが横たわつてゐたのは其處です。白靴が着物の様にヌートの身體を包んでゐました」

と言つて彼女は私の坐つてゐる所に近い場所を指差した。

「ただと今ではもうすつかりあの人の身體は粉になつて了つて、風のために吹き飛んでしまひました」

「さう言はれて私は手を伸ばして、塵の中を捜して見た。すると直ぐに私の指に何物か觸れた。それは人間の歯であつた。非常に黄色くなつてゐるがまだ完全なものである。私はそれを取上げてアツシヤに見せた。すると彼女は笑つた。」

「さうです」彼女は言つた。「それは疑ひなくあの人の歯ですわ。御覽なさいヌートの身體、ヌートの智慧の中で寝つてゐるものと言へば一個の小さな歯だけです。だがヌートは自分でしようと思へば何でもやれたのです。唯自分の良心のためを思つて爲しようとしなかつたまでです。でねヌートは最近に死んだまゝ其處に横たわつてゐました。で私達は降りて行きました。其處へはこれから私があなたを連れて行きます。其處へ行き着くと私は元氣のありつたけを振起し死を賭して火焰の中に歩み入りました。運好くば光輝燦然たる生命の冠を手に入れ得るかも知れないのです。するとどうでしょう！自分で實際感じて見なければとても解りようの無い生氣が私の身内に流れ込んだのです。そして私は不死身になつて想像する事も出来ぬ程美しくなつて火中から出て来ました。そして私はカリクラテス、あなたの方へ腕を差伸ばして、永久の縁にして下さいと言ひました。するとどうでしょう！あなたは私の裸の美しさで眼がくらんで、私から身を背向けました。そしてアメナルタスの胸に眼を隠したのです。それで私は狂り立つて狂人の様になりました。そして私はあなたが差してゐた投槍を擲んで、あなたを刺殺したのです。それであなたは實に「生命」の御所で私の足元で唸いて死んで逝きました。その時はまだ私は自分の眼や意志の力で人を殺すだけの力を持つてゐると言ふ事を知らずにゐたのですから、氣の狂つた様になつて私は投槍で殺したのです。」

「そしてあなたが死んでしまつた時には、あゝ、私は泣きました。何故ならば私は不死身で、あなたは死んだからです。私はその「生命」の御所で随分ひどく泣きました。私があれば少しでも人間らしい者であつたら私の心は裂れてゐたい違ひありません。するとあの色の黒い埃及女は、自分の神々の名を呼んで私を呪ひました。」

「私は一人の女に過ぎません。豫言者では無いのです。ですから未來の事を知ることとは出来ません。だがこの事だけは知つてゐます——これはあの智者のヌートから教はつたのです——即ち私の生命は永く引伸ばされて、普通人よりは輝かしくされた命だと言ふことです。永遠に續く事は出来ません。ですから今行く前に言つて下さいカリクラテス、ほんとに私を許して眞心から私を愛すると言つて下さい」

彼女は言葉を切つた。彼女の聲の限り無いやさしさが、死者の思ひ出かなんかの様に私達の周圍にとびまわる様に思はれた。彼女の聲の調子が、彼女の言ふ言葉よりも以上に強く私の心を動かしたのを私は知つてゐる。

彼女の聲は實に人間らしかつた。實に女らしかつた。レオも奇妙に感動した。彼は今迄の所は自分にさうしてはならぬと言ふ立派な判断がありながら、それに逆つて魅惑されてゐた。丁度それは小鳥が蛇から魅惑されてゐるのいくらか似てゐた。それが今ではその魅惑は去つて了つたらしい。そしてレオは自分が此の不可思議な實に美しい女を眞實愛してゐる事を知つた。あゝ！私も同様に彼女を愛してゐたのだ。

とにかくアツシヤの方へ急いで歩いて行くレオの眼が涙で一杯になつてゐるのを私は見た。彼はアツシヤの紗の面覆を脱がせて、その手を取りながら、美しい顔を見詰めた。次の様に言ひながら。

「アツシヤ、僕はあなたを至心をあげて愛する。ウステーンの死に就てはあなたを出来るだけの事は許してあげま

す。その他のことはあなたと、あなたを捨てた造物主の問題で、僕は何も知りません。私が知つてゐることは私が前例の無い程あなたを愛してゐて、最後まで、その最後が近からうが遠からうが最後まであなたを熱愛するだらうと言ふ事だけです」

彼女はレオの手を取つて格好のいゝ自分の頭上に乗せながら、片膝がちよつと地に觸れるまでに徐々に身をこゝめた。

「見て下さい！ 服従すると言ふ印に私は自分の夫の前に頭を下げます！ 見て下さい！」

そして彼女はレオの唇に接吻をした。

「さあこれによろござんす。これで私はあなたに私の操を委せます。そして暴風が来やうが日の光が照らうが、善い事が来やうが、悪い事が来やうが、病氣にならうが、生きやうが死なうが、變りはしません。ほんとうに現在ある事、現在果された事は永久に續いて決して變る事は出来ないので。前に私が何事に依らず總ての物事は、完成されるには順序に應じて完成されるものだと言つたでしよう。さあ行きましよう」

そして彼女は片方のランプを取上げて、岩の室の奥の方へ進んで行つた。その室の上には先にアツシヤがとまつた揺れてゐる石が屋根の縁にかぶさつてゐた。

吾々三人は彼女の後に従つた。圓錐形になつた岩の壁に一つの階段が在る。もつと正確に言へば、階段の様な格好にうまく作られた數個の石の突出物が在つた。此の階段を下の方へアツシヤは降りはじめた。ンヤモイ羊の様に一段々飛びはねながら行くのである。で吾々もそれに従つた。吾々の格好はアツシヤ程よくはなかつた。十五

六段も降りると、階段は長い岩の傾斜の所でおしまひになつてゐる事が分つた。この傾斜は圓錐筒か漏斗をかかさまにした様な形になつてゐた。

此の傾斜はなかなか急坂になつてゐて、往々にして網壁の様になつてゐた。然し通れない所なんて一箇所も無かつた。

こんな具合にして吾々はかなりの時間前進して行つた。まあ半時間位も行つたらうか。しまひに下へ向いて數百尺行つた後で、吾々がさかさまにした圓錐形の端に到着した事が分つた。其處には丁度漏斗の尖端の所に一條の通路がついてゐた。それを通つて行く時には、皆こゝまなければならぬ程に此の通路は低くて狭かつた。この通路を五十ヤードも行くと、急に廣くなつて洞窟になつてゐる。この洞窟は無性に大きくつて、天井も見えなければ壁も見えない。實際が、重苦しい空氣の完全な静けさの中に吾々の聲音が反響するので僅かにこれが洞窟だと言ふ事が分つた程だ。吾々は數分の間進んだ。その間も長袖に満ちた全くの沈黙のまゝである。まるで死んだ人魂が深い冥途へ行く様だ。アツシヤの幽霊の様な白衣の姿が吾々の前に立つてチラチラしながら行く。その内に此の洞窟も再び終つた。そして一條の通路がある。それを行くと第二番目の洞窟に出た。今度のは最初のものよりかすつと小さい。とうとうこの洞窟も終つて第三番目のトンネルの所に來た。この第三番目のトンネルは微かなボーツとした光で輝いてゐる。

此の光が見え出すとアツシヤが安堵の吐息を漏らすのが聞えた。光が何處から流れて來てゐるのかは分らない。「これでいゝ」彼女は言つた。「地球の子宮の中に入る仕度をなさい。人間や動物などが持つて生れる生命は、地球

が此處で孕むのです。さうです、ありとあらゆる樹や花の中に在る生命と同じことです。さあみんな、用意をなさい。此處であなた方は又新しく生れ變るのですから——

彼女は敏捷に前へ進んだ。それに従つて吾々も出来るだけ早く、けつまづきながら進んだ。吾々の心は酒代の様に、こんぐらかつた恐怖と好奇心で一杯になつてゐた。吾々は今に何をみるんだらう？ 吾々はトンネルを通過して行つた。ブーツとした光の輝きは次第々々に強くなつて来る。今は既に燈臺から放射する光線の様に、大きな閃光となつて吾々の所まで届いて来る。丁度燈臺から放射される光線が、次から次と海上の暗闇を照し出す様だ。それだけでは無い。と言ふのは、閃光にともなつて雷鳴の様な又樹木が折れる様な、魂を揺り動かす様な音響が、響いて来るのだ。さあ、通路は通り抜けた。すると——お、驚くべし！

吾々は第三番目の洞窟に立つてゐる。その洞窟の大きさは長さ約五十尺、高さも多分それ位はあるだらう、幅は三十尺ばかり。床には細かな白砂が敷きつめてある。壁は火のためにさうなつたのか、それとも水のためにさうなつたのか滑らかに磨かれてゐる。此の洞窟は前の洞窟の様に暗くはない。蒼青色をした光の柔かい輝きで一杯だ。これ以上に美しい景物は考へられない。

然し最初は火焰は見えなかつた。雷鳴の様な音も既に聞へなかつた。

だが間もなく、驚き呆れて突立ちながら此の窟の不思議極まる光景を見詰めて、蒼青色の光は何處から来るのだらうと怪しんでゐる吾々の前に、實に恐ろしい美しい事柄が起つた。洞窟の一番奥の所に、物をひき廻る様な凄まじい音がかして——其音の恐ろしさ無気味さと言つたら、吾々が顫え上る程であつた。ヨブに至つてはほんと

に膝を突いてへたばつた程だ——恐ろしい火焰の雲とも火焰の柱とも言はれるやうな火の塊が現れた。そのさまは丁度種々な色を帯びた虹の様でもある、皎々たる電光の様でもあつた。暫くの間(多分四十秒ばかり)この火焰はそんな風で焰を上げ音を立てた。徐々にグルグル廻轉しながら。すると次第に恐ろしい音が止んで来た。そして火焰もろとも消えてしまつた。何處へ消えて行つたか私には分らない。後には、吾々が始めに見たのと同じ蒼青色の光が残つた。

「此方へ、此方へ近寄るんです！アツシヤが喜びのためにまるで有頂天になつた聲で叫んだ。此の大きな世界の窟の所で鼓動してゐる生命の泉、生命の心臓を見なさい。萬物の生の力の源を見なさい。これは地球の輝く靈です。これがなければ地球は生きて居れないのです。生きて居れずに、あの死んでしまつた月の様に冷たくなつて死ななければなりません。近寄つて此の生きた火焰の中であなた方の身體を洗ひなさい。此の火焰の中にある處女を力をつくりあなた方の儼然な身體に取入れなさい——

吾々は蒼青色の光の中をアツシヤの後に従つて洞窟の奥迄来た。そして、大きな鼓動の打つてゐる、あの大きな火焰の通つて行つた窟の所に立つた。其處へ行きながら、吾々は、自分が次第に荒々しく馬鹿にはしやいだ氣持になつてゐるのに氣が着いた。實に輝かしい激しい深い生命感が湧いて来た。この生命感の側では、普通の吾々が精一杯力に充ちて快活になつてゐる時の氣持でさへも、平凡な、なんでも無い弱々しい物の様に思はれた。これは廻轉してゐる火焰が放射する偉かな發散物、微妙なエーテルが、吾々の身體の中に這入つて 吾々を巨人の様に強く、驚の様に敏捷にしたのだ。

吾々は洞窟の奥に達した。そして皎々たる光の中で互同志見詰め合った。心が軽く頭が神々しい様に酔つた様になつて高く聲を立て、笑ひながら。一週間と言ふもの頬笑みもしなかつたヨブでさへ笑つた。

こうして吾々が新生の自我の素晴らしい力を享樂してゐる間に、突然、ズツと遠方から眩く様な恐ろしい音響が聞えて來た。その音響は次第々々に高くなつて來て、物の破壊される様な唸聲の様な音になつた。その音の中には音響と言ふものが表現する事の出來る、恐ろしくも、又許殿な響きのすべてを含んでゐた。音は次第に近づいて來る。しまひに吾々のほんの直ぐ側迄迫つて來た。雷光の後に續く雷鳴をありつたけ鳴らす様な響をゴロゴロと立てながら、次第に近づく。すると音響と共に、雑多な色をした眼もくらむばかりの熾然たる光が近づいて來た。それは徐々と廻轉しながら、吾々の前方に暫時停止した様に思はれた。その後で、華々しい音響を後に従へて、消え去つた。何處へ消え去つたのか私には分らない。

吾々はもうすつかり此の驚くべき光景にびつくりして、その前にへたばつてしまつて、顔を砂の中に隠した。唯女神だけは起立つて、火焰の方へ兩手を差伸した。

火焰が消え去ると彼女は口を切つた。

「カリクラテス」彼女は言つた。「どうとう時が來ましたわ。あの大火焰が今度やつて來たらあなたは、あの火を浴びるんですよ。だが着物は脱いで下さいなさい。火焰はあなたの身體に傷はつけはしませんが、着物は燃えますから。あなたは、辛抱の出來る間火の中に立つてゐなければなりません。火があなたを包んだら、火の精を心臓の底まで吸ひ込むんです。そして手足のまわりをまんべんなく跳びまわらせなさい。火の効力を少しでもなくさない様に

ね。聞いてみますわね、カリクラテス？」

「聞いてみます」レオは答へた。「だが、ほんとに……僕は卑怯者では無い……があの猛り立つてゐる火焰の中に入つても大丈夫かと思ひますがね。あの火が僕を滅茶々々にしてしまつて、僕自身が死ぬ上に、あなたまでなくしてしないかどうかといふ事はつきりしないんですからね。だが然しやるにはやります」とレオは附け加へた。

アツシヤは暫く考へてから言つた。

「あなたが疑ふのも無理はありません。ぢやどうでしょうカリクラテス、若し私がああ火の中に立つて何の傷も受けずに出て來るのを見たら、あなたも這入りますわね？」

「さうです。僕は火から殺されたつて這入ります。今だつて這入ると言つたぢやありませんか」レオは答へた。

「私だつてそれなら這入る」私は叫んだ。

「何ですつて、ホリー。」と彼女は高く笑つた。

「あなたは永生きをしたくは無いと言つたのぢやないの。それに、どうしてさう言ふのです？」

「いゝわ、私は知りません」私は答へた。「だが私の心の中に此の火を浴びて、永生きをしろと私に向つて呼ぶものがあつたのです」

「それはいゝ」彼女は言つた。「あなたもまだまるで馬鹿にはなつてないんですね。さあ御覽なさい、私が此の生きた火を浴びるのはこれで二度目です。出來るならば、私の美しきも更に美しくしたいし、命も長くしたい。それが出來ないにしても、傷を受ける様なことはあり得ません」

彼女はちよいと黙つてから言葉を續けた。

「それに又、私が此の火に今度再び身をつけるには、その外の深いわけがあるのです。私が最初此の火の効力を味はつた時には、私の心は激しい情と、あの埃及女アメンタスに對する憎悪で一杯になつてゐたのです。だから、私が拂ひのけようといくら努力しても、激しい情と憎悪が、あの悲しい時から今まで私の魂に印されてゐたのです。だけど今はもう違ひます。今は私の氣持は幸福です。私の心は清い清い思ひに充たされてゐます。で、このまゝで何時までも居たいのです」

二十六 吾々が觀たもの

それから暫時沈黙が續いた。

その間アツシヤは恐ろしい冒險をするに當つて勇氣を集中してゐるらしかった。一方吾々三人は互にしがみ付いて、すつかり沈黙したまゝ待つてゐた。

終に遠い遠い所からあの音の最初の、唸聲が聞えて來た。音は次第に大きく高くなつて來て、しまひにはパチパチゴゴと非常な勢ひになつた。それを聞くとアツシヤは素早く紗の上衣を投げ捨てた。そして胴の蛇の形をした帯をゆるめた。それから、美しい髪の手を着物の様に體の周圍に振りながら、その下で白衣を脱ぎすてた。そして

蛇の形をした帯で、垂れてゐる髪の手の上から胴中をしぼつた。

丁度アダムの前に立つたイヴの様に、彼女は吾々の前に立つた。身には一片の布も着けてゐない。嚙着けてゐるものと言へば、黄金の帯で身の周圍にしぼりつけた豊かな髪の手ばかりだ。どんな言葉を使つても、彼女の美しさ又その神々しさを言ひ現はす事は私には出來ない。火焰の轟々たる輪は次第々々に近くなつて來る。するとアツシヤは黒い髪の手の中から象牙の様な片手を出して、それをレオの頸に巻付けた。

「あゝ、私の戀人、私の戀人！」彼女は囁いた。「私がどんなに強くあなたを愛してゐるかと言ふ事があなたに解りますかしら？」

そして彼女はレオの頸に接吻した。そして疑ふものゝ様にちよつとためらつた。それから、前に進んで行つて、「生命の火」の通路に突立つた。

すると既に火の柱の縁が現はれた。アツシヤはその方へ身を向けた。そして火に向つて兩腕を突出した。火柱がごくそろそろ進んで來て、彼女の身のまわりを火でなぶつた。私は火焰の體が彼女の身體を走り上るのを見た。彼女がその火焰が水でもあるかの様に兩手で持上げるのを見た。その上に彼女は口を開いて火焰を肺臓の中に吸こむのが見えた。それは實に恐ろしい、破天荒な光景であつた。

すると彼女は凄然となつた。そして、兩腕を差出しながらじつと靜止して立つてゐる。その顔には天使の様な微笑を燦べてゐる。そのさまは實に彼女が焰の精でもあるかの様だ。

不思議な火焰は彼女の黒い渦巻いてゐる髪の手を上下に燃え、チヨロチヨロとその間を抜けて、つて、恰く黄金

のレース糸の様である。胸や肩からは髪の毛がずり落ちてしまつてゐる。その象牙の様な胸や肩の上に火焰が輝く柱の様にキチンと直立した咽喉や繊細な顔の道具の上を焰がすべる。そして、燃える靈のエーテルよりも凄然と輝く両の眼に、焰がじつと落ち着いた様に思はれる。

おゝ、その火焰の中のアツシヤの姿の美しさ！ 天から来た天使だつてこれ以上の美しさはとても持つ事は出来ない。

然し突然に——餘り突然で私には言へもしない——彼女の容貌に名状すべからざる變化が現はれた。どんな變化だとも、どんな風な變化だとも私には言へない。か、それにも係はらず變化には相異なる。今までの微笑が消えた。そしてその代りに彼女の顔には乾いて堅くなつた様な表情が現はれた。今迄丸かつた顔が縮んで来る様に見えた。それが丁度何か大きな辛苦が顔にその痕跡をとどめでもした様であつた。今迄輝かしかつた両眼も亦光を失つた。そして彼女の姿からは今迄の完全な形や真直な所も消えうせた様に思はれた。

私は自分の眼をこすつた。何か錯覺にとらはれたか、それとも強い光の輝きが幻視をひき起したかと思つたのだ。私がこうして驚愕してゐる間に、焰の柱は徐々とねぢれて、大音響を立てながら、大地の内臓の方へと去つてしまつた。後には火の柱の在つた所にアツシヤが立つてゐる。

火の柱が去るや否や、彼女は、レオの方へと歩み寄つた。——私には彼女の足取りに弾力が無い様に思はれた。

——そして腕を差出してレオの肩に掛けた。私は彼女の腕を見詰めた。今迄の素晴らしい丸味と美しさは何處へ行つて了つたのだらう？ 見れば瘦せてしまつてゴツゴツ骨張つてゐる。それに彼女の顔、それが一體どうした事だ。

私の眼前で、次第々に歳を取つて来るではないか！ 多分レオもそれを見たらしい。たしかに彼は少し縮み上つた。

「どうしたの、カリクラテス？」と彼女は言つた。その聲、今迄の深い頗ぶ様な聲の調子は一際どうしたのだらう？ 今はガラガラした金切り聲になつてゐる。「私は眼がくらんだのです。あの火の性質が變つてゐるなんて事はありませんからね。「生命」の原則が變るなんてことがあり得るでしょう？ カリクラテス言つて下さい、私の眼がどうかやつてゐますか？ よく見えませんか？」

そして彼女は手を自分の頭に持つて行つて髪の毛に觸つた——すると、あゝ恐るべし、恐るべし——その髪の毛が床の上に落ちたのだ。

「あれ！ あれ！ あれ！」ヨブが恐怖の金切り聲で叫んだ。彼の眼は眼がとび出しそうになつてゐる。唇には泡を吹いてゐる。

「あれ！ あれ！ あれ！ 淵んで行く！ 淵んで行く！ 淵んで行く！」

そしてヨブは發作を起して泡を吹き齒軋りをしながら地上に倒れた。實に其通りだ。アツシヤは淵んで行く。私にはあの時の恐ろしい記憶をマザマザと思ひ出すと之を書いてゐてさへも氣が遠くなる様な思ひがする。今迄彼女の優美な身體をしめてゐた蛇形の黄金の帯は腰から地上に脱け落ちた。次第次第に彼女の身體は小さくなつて来る。皮膚の色が變つて、ツヤツヤしてゐた純白は、古い織くちやの羊皮の片の様に、汚らしい黄褐色になつた。彼女は自分の頭に手を觸れた。今迄の繊細な手は、今はもう爪としきや見えぬ。保存の悪い埃及木伊乃の人間の爪そつ

くりだ。それでアツシヤは自分の身體にどんな變化が起つてゐるかを知らしめた。で彼女は叫んだ。あゝ、叫んだ！アツシヤは床の上に轉がりながら叫び立てた。

次第次第に小さく小さくなつて行く。しまひには猿同様に小さくなつてしまつた。今はもう彼女の皮膚は無数の皺でちぢんでしまひ、形もなにもくづれてしまつた顔には言葉では言へない程の年齢の印が現はれた。私は今迄この様なものを見たことが無かつた。この恐るべき顔に刻みつけられた無限の年齢に匹敵する様なものを見た人間は今迄此の世に一人もゐないに違ひない。これから氣が狂ふまいと思ふならば誰でもこんなものを見ない様にと神様に祈るがいゝ。實に頭蓋骨は元通りの大きさのままなのに、顔だけが生れてから二箇月ほどの赤子の顔と同じ位になつた。

終に彼女は死になつたまゝぢつとなつた。いやほんの少し弱々しく動くだけになつた。

「カリクラテス」彼女は囁いた頭聲で言つた。「カリクラテス、私を忘れないで下さいね。私の取かしい此のざまを可哀相だと思つて下さい。私は死にはしません。又生れて來ます。そして、もう一度美しくなります。私は誓ひます、これはほんとうですよ！おゝ……」

そして彼女は顔をうつ伏せにグダリとなつて、動かなくなつた。

然り、かくして二千年以上の昔自分が僧カリクラテスを刺し殺した當の擧げで、アツシヤは自ら倒れて死んでしまつた。

極度の驚愕のために、吾々も此の恐ろしい洞窟の砂の床上に倒れた。そして氣が遠くなつた。

され位の間吾々がその状態のままであつたか私は知らぬ。多分數時間も経つたらう。最初私が眼を開いた時にはレオとヨブはまだ床上に長々と身を横たへてゐた。蒼蒼色の光は、天上の曙の様にまだ輝いてゐた。そして「生命の精」の雷鳴の様に轟く輪は尙もその軌道を廻轉してゐた。私が起上つた時には大火柱が丁度通り過ぎやうとしてゐたのだ。其處には又、曾ては輝く様に美しくあつた女神であつた所の醜惡な小猿の體が皺だらけの皮に蔽はれて横たはつてゐた。あゝ！それは忌はしい夢では無かつた。實に恐ろしくも類ない事實だつたのだ！

何が一體此の忌はしい變化を惹起させるに至つたのか？生命を與へる火の性質が變つてしまつたのか？此の火は若しかすると、生命の精の代りに時々死の精を出したのであるまいか？

だが此擧合「何事が」起つたかを何人が言ひ得るだらうか？事實が存在してゐるのだ。

暫しの間私はぼんやりと恐怖を心の中で繰返しながら横はつてゐた。その内に私の體力は回復して來た。周圍が浮々としてゐるために回復は早かつた。それで私は他の二人の事を思ひ出した。でヨロヨロしながら立上つた。二人を正氣に返せるかどうか見やうと思つたのだ。だが先づ私はアツシヤの着物と紗のスカーフを取りあげた。彼女が眼もくらむばかりの自分の美しさを始終人に見られない様に隠すために使つてゐたものだ。そして見ない様に頭をそむけながら、あの美しかつたアツシヤの恐ろしい死骸を包んだ。これは實に人間の美と人生の、忌はしい縮書である。私は急いで包んだ。レオが正氣に返つて又アツシヤの死骸を見ることを恐れたのだ。

その後で、私は砂上にちらばつた黒髪のをまたいでヨブの傍へ行つた。ヨブはうつ向きになつて倒れてゐた。で私は彼の身體をひつくり返した。私が彼の身體を持上げると、彼の腕が不氣味にダラリとなつた。——あまりの

不氣味さに私はゾツとした。それで私は彼の顔をキツと見た。一眼見たゞげで充分だった。此の吾々の忠實な老僕ヨブは死んでゐたのだ。

これは再度の打撃であつた。だが此の事實を以てしても、吾々の経験した事件が如何に恐ろしいものであつたか解るだらう。だがその時は大して恐ろしいとは感じなかつたのだ。可哀相に老ヨブが驚いて死んでしまつたと言ふ事は極めて自然に思はれた。

レオはそれから十分ばかり経つてから、唸り聲を立て四肢を戦慄させながら正氣に歸つた。で私はヨブが死んだ事を告げた。すると彼は唯「おー！」と言つたばかりであつた。此の事はレオの無情さから出た事で無いのに注意して貰ひたい。と言ふのはレオとヨブとは互によく愛し合つてゐた仲だ。今でもよくレオは非常に残念がつて慕はうにヨブの事を語る。だからこの事は無情から出たことではなしに、レオの頭腦が最早耐え切れなかつたのだ。琴をいくら強く弾いて見ても、一定の音量以上に音は出ず事は出来ない。

で私は一所懸命になつてレオを介抱した。レオは死んでゐるのではなくて、唯氣を失つてゐたばかりだと言ふ事が分つたので、私は此の上もなく安堵した。そして最後に「前に言つた通りにうまく正氣に歸らせる事が出来た。彼は起き上つて坐つた。すると私は又更に恐ろしい事を見た。吾々が此の畏るべき洞窟の中に入つて来た時には、レオの頭の卷毛は薔薇色の生々とした黄金色をしてゐた。それが今では灰色になりかけてゐる。そして吾々が外氣の中に出た頃には、雪の様に眞白になつてゐた。その上に彼は二十歳位老けて見えた。

「叔父さん、さうしよう？」彼は虚ろな死んだ様な聲を出して言つた。その時には少しは意識がはつきりとして、

先程起つた事件の記憶が彼の心にとシヒシと浮んで来たのだ。

だが吾々は其處を立去る前にヨブの冷たい手を取つて握手した。それは無氣味な禮式の様な氣がした。然し此の忠實な死者とその葬式に對する敬意を拂ふ方法はそれ以外にはなかつたのだ。白衣の下にある死骸は開いて見なかつた。吾々はあの恐ろしい死骸のさまを二度と見たい氣は無かつた。然し吾々は、アツシヤがああのだらうと身體の變化の苦惱、千萬の普通の自然死よりも尙激しい苦惱にさいなまれてゐる時に、彼女の頭からぬけ落ちた縮毛の束のある所へ行つて、各自一つづつ澤々した房毛を取つた。此の房毛はまだ持つてゐる。これは吾々の知つてゐる豐滿に優しい彼女が吾々に残した唯一の形見である。レオはその匂やかな髪を唇に押しあてた。

「アツシヤは忘れてくれるなと僕に言つた。彼は嘆聲で言つた。そして自分と僕とは再會するのだと誓つた。決してどんなことがあつても僕はアツシヤの事を忘れはしない！僕は此處でそれを誓う、若し生きてゐる間逢ふ事が出来なかつたとしても、一生涯僕は他の生きてゐる女に關係はしない。そして何處へ行つても、アツシヤが僕を待つてゐる通りに僕も心變りをせずにアツシヤを待つのだ」

「さうだらう」と私は心の裡で言つた。若し彼女が僕の通りに綺麗になつて来たならさうだらう。だが若し生れ變つて来たアツシヤがああ、あんな様子だつたら！」

そして吾々は其處を去つた。二人の死者を此のかくれたる生命の源泉の前に、而も冷たい死と共に残して置いたまゝ、吾々は去つて行つた。其處に標はつてゐる二人の身體の寂然たる様よ！而も何と言ふ變な取合せだらう！あの小さな堆積の様な死骸は二千年の間此全世界に於て最も智に勝れ、最も美しく、最も誇りかな女だつたのだ。

女と言ふには餘りに過ぎた女だったのだ。

二十七 跳ぶ

洞窟の中は易々と踏も無く通つて行けた。だが、避になつた圓錐形の傾斜地の所へ来ると二つの障礙物が眼前に現はれた。最初の障礙物は坂が急で昇るのが困難なことであつた。次の障礙物は通路を窺見するとが至難であると言ふ事であつた。

二人は殆ど口を利かなかつた。吾々の心は口も利けない程重かつた。時々どつ鈍れて怪我をしながら、しつこくフラフラと歩いて行つた。實際吾々の心は押しつぶされてしまつてゐたので、何事が起らうと入して氣に掛らなかつた。唯吾々は單に出来る限り助かる様にしなくてはならないと感してゐたばかりであつた。全く吾々を歩かせるのは自然的な一種の本能であつた。そんな風で吾々は三四時間もフラフラ進んで行つた。と私は思つた——と言ふのは故障の無い時計がもう一つも無くなつてしまつたので、正確に何時間と言ふ事が出来ないのだ。後の二時間と言ふもの吾々は全く道に迷つた。私は、こいつは傍路の圓錐形の漏斗の中に迷ひこんだのではなからうと思ひ始めた。すると丁度その時、私は不意に一個の巨大な岩を目にした。この大岩は吾々が此の洞へ入る際に、降りかゝつてから間も無く見た大岩だつたのだ。

それから大した困難も無く、僅の自然の岩の階段に達した。間もなく、死んだヌートが住んでゐて死んだと言ふ

あの小さな室の中に再び吾々は居た。然し今度は新しい恐怖が吾々の前に現はれた。讀者諸君も御記憶のことであらう。吾々が巨大な獸爪から揺れる岩へと渡る時に使つたあの板は、ヨブの恐怖と卑怯のために下方の恐ろしい深淵の中に落ちてしまつたのだ。

あの板が無くてどうして此處を渡るのだらう？

それには唯一の解決があるのみだ——即ち跳び越えなければならぬ。でなければ今居る所で死んで了ふばかりだ。その距離を言へば大した事は無い。まあ十一二尺もあらうか。所でレオが若くつて大學に居た時には二十尺以上、跳んだのを私は見たことがある。然し今は周囲の状態を考慮しなければならぬ！二人の疲れ果てた男、その中の一人はもう四十の降り坂だ。それが此方の揺れてゐる岩から、數尺を距て、彼方に在る懸えてゐる岩の先端へ向つて跳ぶのだ。それに荒れてゐる風の中を底無し淵を跳び越えなければならぬ！

實に危険きわまる事だ。それは神様だけが御存じの事である。だが私が此の事をレオに言つて了ふとレオはテキパキと次の様に答へた。「どつちにしても危険はわかりきつてゐる。唯、此の小室にグズグズして死ぬにきめるか、それとも空中を跳んで手つ取り早く死ぬ危険を冒すか、二つに一つを選ばなければならぬ」

レオの此の言には何等反駁の餘地は無かつた。然し暗闇で跳ぶことなんか出来ないのは明白なことだ。だが今の所、日没になつて日光の光線が淵に差込んで来るのを待つ外に仕方が無かつた。日没迄どれ程の時間があるものか勿論少しも分らなかつた。唯分つてゐる事はいつたん光線が差込んで来たら、二十分以上はたつぷり持續すると言ふ事だけだつた。で光線が差込んで来た時の用意をしなければならぬ。

吾々が来る時、此方の岩へ廻らぬ前にアツシヤが岩の隙爪の上に立つてゐた際に風が吹いて彼女の外套を吹き飛ばして、何處へ行つたか見えないが眞暗な深淵の中にさらつて行つた事を讀者は記憶して置られるであらう。所が——私は此の話をほんとに話したくない。餘り不思議だからだ——吾々が揺れてゐる岩の上に横はつてゐると、當のその外套が眞暗な空中から漂ふて来て、(死者の記憶の様に)レオの身體の上に落ちた。丁度レオの足から頭まで磁石様な風に落ちたのだ。私は最初それが何だか分らなかつた。だが直ぐにその地合を見て、アツシヤの外套だと分つた。すると、可哀相にレオが今迄耐えてゐた悲しみを初めて外に出した。岩の上で彼が騒り泣くのを私は聞いた。

外套はたしかに絶壁の尖岩にひつかつてゐたのだ。そして其處からたまたま突風のために此處へ吹きやられて来たのだ。とにかくこれは實に不思議にも可哀れな出来事であつた。

間もなく、思ひがけもなく突然に、刀の様な赤い光線が現はれた。そして暗黒をズバリと刺し貫いた。吾々の乗つてゐる揺れる岩にも當つた。そして光線のギリギリする先端は、反対側の隙爪の上に止まつた。

「跳ぶのは今だ」レオが言つた。「今跳ばねば永久に跳べない」

「誰が一番目に跳ぶんだ？」私が言つた。

「叔父さん、あなたなさい」オレは答へた。

「僕は此の岩が揺れない様に、向ふの端に坐つてゐます。出来るだけ走つて来て、高く跳ばなくちやいけませんよ。その先は神様委せだ！」

私は點頭いて納得した。それから私はレオが子供の時以來しなかつた事を爲した。振向いて彼を抱いて彼、額に接吻した。こう言ふと何だか佛蘭西ぢみて聞えるが、私は、これが自分の親身の子供であつたとしても、これ以上は愛しきれない程熱愛してゐる者と最後の告別をしてゐたのだ。

「左様なら。たとへ何處へ行つても又逢ふねえ」

ありやうは、私はもう二分間は生きては居まいと思つてゐたのだ。

次に私は岩の最末端の所まで身を退いた。そして刻々に風向きの變る突風が、私の後方へ吹き去るのを待つてゐた。それから私は巨岩の長さの三十三四尺ばかりの間を走つて行つて、勢猛に目もくらむ様な空中へ跳び上つた。おゝ！私の身がその岩の細端を離れた時に感じて無氣味な恐怖。それから、跳び方が足りなかつたな、と思つた時私の頭の中に閃く様に起つた恐ろしい絶望感！然もそれは事實だつたのだ。私の足は決して向ふの岩の尖端に觸れずに、空中へ落ちて行つた。唯僅に手と身體だけが岩の尖端に衝突した。私は叫聲を擧げながらそれにかちり附いた。然し片手が滑つた。それで私の身體は右の方へグルリと廻轉した。片手でぶら下つてゐるのだ。で私は今跳んで来た反対側の岩に向ひ合つた。苦しみながら私は左手でしがみ附いた。今度はうまく岩の凸出部を握る事が出来た。正に私は鋭い赤光の中にぶら下つたのだ。下方には何千尺の虚空がひろがつてゐる。私の手は隙爪の下部の兩側を握んでゐるので、隙爪の先端が私の腕に觸れる。それ故にたとへ私に力が有つても、身體を上へ引上げる事は出来ないのだ。どれ程一所懸命になつても一分間ばかりしきやぶら下つて居る事は出来ない。一分間経てば底無し穴に墜落するばかりだ。誰かこれ以上に恐ろしい境遇を想像する事の出来る人があつたら、言はせて見るが

いゝーあの時の半分間の苦惱のために殆ど私の頭は變になりかけた程だ。

レオが叫聲を立てるのが聞えた。それに續いて突如、レオが恰もシヤムア羚羊の様に中空へ跳び上るのが見えた。それは實に素晴らしい跳躍であつた。恐怖と絶望の力がそれをさせたのだ。恐ろしい深淵を何でも無い様に跳び越して、獸爪の岩の尖端の上にもうまく飛乗つた。そして深淵に眞逆様に落ちぬ様に俯伏せに身を倒した。次の瞬間に私はレオが私の右手の關節の所を両手で掴んだのを感じた。岩の先端上に腹這つて了度私に固く事が出来たのだ。

「叔父さんは両手を離して、自由に揺れるようにするのだ」レオは静かな自若たる聲で言つた。「それから、僕が叔父さんを引つ張り上げて見ます。でないと二人とも落ちますよ。いゝんですか？」

返事の代りに私は岩を掴んである手をゆるめた。最初左手をゆるめてから次に右手をゆるめた。その結果として頭上の岩の先端を揺り離れた。私の身體の重味はレオの両手に掛つてゐる。實に恐ろしい瞬間だ。

二三秒間さうして前後に私は揺れてゐた。その間レオは私を引上げる用意のために力を集中してゐた。すると私の頭上で彼の筋肉がメリメリと音を立てるのが聞えた。そして私は私の身體がまるで小兒の様に上に引つ張り上げられるのを感じた。次第に引上げられて、しまひに私の左腕が岩の周囲にかゝつた。そして私の身體は左腕で保たれた。後はもう何でもなかつた。二三秒間の後には、私は岩の上にもた。そして吾々二人は了度木の葉の様に打顛えながら並んで倒れながら喘いでゐた。肌からは恐怖の冷汗がタラタラと流れた。すると、此の前と同様に、日光の光線がランプの光の様に消えてしまつた。

そのまゝで約半時間ばかりと言ふもの二人は一語も發せず休息してゐた。だがしまひに巨大な此の岩の獸爪の上を這ひ始めた。眞の闇なのでまゝ這つて行く位が關の山なのだ。此の岩の獸爪は斷崖の面から了度壁にさゝつた釘の様に突出してゐる。その斷崖の面に次第に接近して行くと、少しは明るくなつて來た。でも上空の方は夜なので明るいと言つた所ではんの儘であつた。それから突風の勢が弱くなつた。吾々はかなり前進することが出来た。そしてとうとう第一番目の洞窟（或はトンネル）の口に達した。

然し今度は又新しい困難が待つてゐた。油はすつかり盡きてしまつたし、ランプもたしかあの墜落した揺れ岩の下敷になつて粉々になつたのだ。吾々には渴を醫すべき水の一滴だにも無い。ヌートの石室の中で飲んでしまつたのだ。此の岩の大塊だらけの洞内を通るのにどうして道を見分けたらいいのだらう？

最早觸覺を信頼して、暗黒中に道を手探りながら行くより外に仕方がなくなつた。それで吾々は洞内へ入つた。此の都合悪圖々々してさうしないであらう、疲勞のために參つてしまつて、へたばつたなりで死んで了ふのは必確だと思つたのだ。

身心共に踰越として二人は進んだ。一時間又一時間と進んだ。二三分毎に休息するために停止した。二人の力はもう盡きてゐたのだ。一度などは二人は眠つてしまつた。四五時間位眠つてゐたらしい。といふのは今度眼が覺めて見ると四肢がもうまるでコチコチになつてゐて、打撲傷や擦過傷などから流れ出した血が、凝結してしまつて、皮膚の上に固く乾いてゐたからだ。それから再び吾々は身體を引づつて前進した。そして、とうとう二人の心が絶望しかけた頃になつて、吾々は再び日の目を見た。そして自分達がトンネルの外の礫の岩の露目とも露跡とも言へ

る幾々所に出てるのを知った。これは既に、讀者は記憶されてゐる事と思ふが、あの絶崖の外面から讀いてゐる露路である。

早朝であつた——それはさわやかな空気の感じや、美しい空の色で判然たる事が出来た。吾々は美しい空の色などを又見れるなどは思つてゐなかつた。吾々が此のトンネルに這入つたのが、日没後一時間位だつたとして、今が早朝なのだから、此の恐ろしい所を這つて来るのにまる一晚かゝつたわけである。

「レオ、もう一踏ん張りだ」私は囁いで言つた。「さうすれば、ピラリの居る傾斜地へ着くんだ。ピラリが立去つてさえるなければね。さあ、へたばるんぢやないぞ」

それは、レオが打伏してしまつたから私は言つたのだ。

彼は起上つた。二人は互に寄りかゝつて断崖を約五十尺ばかりも這ひ降りた。どんな風にして這ひ降りたのか私にはまるで、憶えてゐない。唯憶えてゐることは、網壁の下に折重なつて倒れてゐる自分達に気が付いたことだ。そして又更に、二人は四道ひになつて、女神がピラリに「私の歸りを待つて居よ」と命じた森の方へ這つて行き始めた。何故ならば二人はこれ以上は一尺も歩けなかつたのだ。

こんな風に四道ひになつて四十ヤードも行かぬ内に、一人の啞が、左手の樹の間から出て来た。私が思ふのこの啞は朝の散歩に樹の間を通つてゐたものらしい。その啞の男は、吾々の方へ走つて来た。不思議な動物だが一體何だらうと思つて、それを見るためだ。その男はチロチロ吾々を見詰めた。すると驚いて兩手を上に差上げた。そして地上に倒れかけた。その次に彼は、約二百ヤード離れてゐる森の方へ向つて一所懸命に逃げ出した。此の男が

二人の姿を見て驚いたのに少しの不思議も無い。吾々二人の様子は實に物凄なものがあつたに違ひ無いらつた。

間もなく老ピラリが此方へ向つて急いでやつて来るのを見て私は此の上もなくホツとした。だがその時でさへ、ピラリの殿めしい顔付に現れた驚愕の情を見ると、私は微笑すには居れかつた。

「お、佛々！ 佛々！」ピラリは叫んだ。「やあ、こいつはほんとうにあんたと獅子かな？ どうしたんぢや、獅子の髪の毛は元は熱れた穀物の様な色をしてゐたのに、今は雪の様に白いちやないか。何處から来たのぢや？ あの豚は何處にゐるのぢや、それに全能の女神は何處に御座るのぢや？」

「死んだ、二人とも死んだ！」私は答へた。「だが何も問はないで下さい。吾々を助けて下さい。喰物と水とを下さい。でないとなあなたの眼前で吾々も死んで了ひますよ。吾々の舌が渴のために黒くなつてゐるのが見えませんか？ だのにどうして歩けるもんです？」

「死んだ！」ピラリは囁いだ。「そんな事は無い！ 決して死なない女神が——死んだ、どうしてそんな事が有り得るだらう？」

それからピラリは、吾々の方へ急いでやつて来た啞の連中から顔を見られてゐる事に気が附いたらしく、言葉を切つた。そして吾々を彼等の夜營地へと運ぶ様に合圖をした。

幸ひに吾々が夜營地へ到着した時には、何かの汗が火の上に煮えてゐた。でピラリはこれを吾々に喰べさせて呉れた——吾々は餘り疲れてゐて自分で物を喰ふ事が出来なかつたから——吾々が過勞のために死ぬことをまぬがれたのはそのためだつたと私は堅く信じてゐる。その後でピラリは啞に命じて、濡布で血や痰血を吾々の身體から拭

ひ取らせた。それが済むと吾々は積み重ねた香草の上に寝せられた。そして間もなく死んだ儘に眠りこけてしまった。その後は身も心もまるで覺えがなくなつた。

二十八山を越えて

「獅々、あなたは随分永いこと寝なすつたね」と老ピラリが言った。

「どれ位寝ました？」私は訊ねた。

「太陽がしまわりして月がしまわりする間ぢや、一晝夜が間眠つた。獅々も同様ぢや。それ、まだ眠つてゐる」

「眠つて有難かつた」私は答へた。「眠りは記憶を消してくれますからね」

「わしに話して呉れ」ピラリは言った。「あなた方には一體何が起つたんだね。それにあの不死の女神が死なれたと言ふ其不思議な話を言つて聞かして貰ひたい。考へて御覽。ね、若し女神が死なれたと言ふ事が眞實であつたとしたら、あなたと獅子の身の危険は大きなものですぞ——さうさ、例の焼けた齋を頭に置かれもしかねまい。それにあなた方を喰はうと言ふ奴等の腹はもう喰ひたくつてベコベコなのだから。御存じかな、あの洞窟に住んでゐるわしの子供等のアマハツガー人はあなた方を憎んでゐるのですぞ？ 彼奴等は他國人としてあなた方を憎んでゐます。それあなた方のために同胞が女神から罰を受けたので尙のこと憎んでゐるのぢや。一度全脂の恐ろしいヒヤの事を畏れる心配が無いと知つたが最後、彼奴等があなた方を齧で殺して了ふのは必餘です。だがまあその話の方

を聞かして貰はう」

こう乞はれて私は話し始めた。そして彼に話つた。實はそつくりは話さなかつた。と言ふのはそつくり話して了ふのは都合が悪いと思つたからだ。唯、もう既に女神は噴火山の火焰の中にほんとに落ち込んで焼けて了つて（私はさう言つた）死んだと言ふ事を解らせるだけのことを話した。何故ならばピラリには本當のことは解りつゝが無いかからだ。私は又、吾々が逃げるために經て来た危険を三つ四つ話した。それは彼に深い感銘を起させた。然しピラリはアツシヤが死んだと私が言ふのを信じてゐない事が私にはよく分つた。吾々は死んだのだと思つてゐるばかりだと彼はかたく信じてゐた。そして説明して言ふには一時姿を隠すのはアツシヤに適はしいのだと言ふ。彼は言つた。「わしの親父の時代にね、女神は十二年間と言ふもの姿を消された事がある。それから又此の國にはこんな傳説もある。と言ふのは遠い遠い昔のこと、まる三十年間と言ふもの誰一人として女神の姿を見なかつた、所が突然に女神が姿を現して、女王の位置を占めてゐた女を殺されたのぢや。」

これに對して私は何と言はなかつた。唯悲しげに頭を振つた。あゝ！ 私はアツシヤが再び來ない事を餘りによく知つてゐる。でなくても、とにかくピラリがアツシヤを見る事はもう決して無いのだ。何處か他處で彼女を見付け出す事はあり得るかも知れない。そして多分は見付け出すであらうと私は信じてゐる。が然しそれは此處では無いのだ。

「所でだ」最後にピラリは言つた。「あなたはどくなさるんだ、獅々？」

「いや」私は言つた。「私には解らないんですよ、長老。此の國から逃げ出す事が出来るでしようか？」

ピラリは頭を振った。

「それは仲々むづかしい。コール國を通つては行けない、と言ふのはあんた方が若し人に見られたら、その上にあんな方がもう二人つきりだといふ事をあの悍猛な奴等が知りでもしたらばだ。——それ」と言つてピラリは意味ありげに薄笑ひをして、頭に帽子をかぶせる様な手附をした。

「然しわしが一度あんたに話した事のある崖を越える路が一つある。草原の方へ牛を追ひ出す路ぢや。その草原の向ふには沼地があつて、それを渡るには三日間かゝる。それから先のことはわしは知らぬが噂に聞けば沼地から七日間だけ進んで行くと大きな河が一つ流れてゐるそうだ。その河は黒河に流れ込んでゐるそうだ。その河の岸に着く事が出来たら若しかすると逃げる事が出来るかも知れぬ。だが、その岸までどうしてあんたが行けるかの？」

「ピラリ」私は言つた。「あなたも知つての通り私は一度あなたの命を救ひましたね。長老、今度はあなた報酬を返して下さい。そして私の生命と私の子供の獅子の生命を救つて下さい。」

「獅々よ」老人は答へた。「わしを恩知らずな人間だと思はないで呉れ。わしはあの罽籠かきの奴等が突立つたままわしの覆れるのを見てゐた時にあんたがどうしてわしを救つて呉れたか、わしはよく憶えてゐる。受けただけの事は恩返しをしよう。若し助かるものだつたらわしがたしかにあんた方は助けてあげる。それでね、明朝は用意するが、いゝ、罽籠を持って来て山と山の向ふの沼地を越させてあげますからな。女神の御命令だと言つてさせよう。女神の言に従はぬ者は狼の餌食ぢやと言つてね。それから、沼地を渡つてしまつたらあんた方自身で精一杯やつて見ることだ。それで若し運がよかつたら、今わしの言つた黒河に着くまで生きてゐる事が出来るだらう。ところで

あれ獅子が眼をさましたからわしがチヤンと拵えて置いた喰物をお喰べ」

一度すつかり眼をさました時には、レオの身體の具合はかなり善くなつてゐて、外見ほどは無かつた。で、二人はひどくベコベコに空いてゐた腹にしこたま喰つた。食事がすむと吾々はびつこを引き引き泉の所に入つて水浴をした。それから歸つて来て更に夕方まで眠つた。夕方になると再びたらく食事を採つた。その日は終日ピラリは留守であつた。てつきりピラリはその間罽籠と罽籠かきの準備をしてゐたのだ。からして眞夜中になつてかなりな人数の人が小さな隊を組んでやつて来た。そのために吾々は眼を覺した。

夜明けになるとピラリが現れた。そして皆が畏れてゐる女神の名を使つたらうまく行つたことを告げた。かなり難かしい事もあつたけれども、必要なだけの人数と、沼地を案内して呉れる二人の案内者にはうまく女神の名が利いたと言ふ。そして又ピラリは直に出発する事を主張した。同時にアマハツガー人が反逆するのを防ぐために自分も一緒に吾々について行く積もりだと言つた。此の野蠻な老獵人に、全くの抵抗力の無い他國人である吾々二人に對するこの様な親切氣があるのを知つた私は感動した。

そこで朝飯を喰へ終ると吾々は罽籠で出發した。長いこと休息して眠つた後なので肉體的には殆ど全く疲勞から回復した事を感じながら。だが吾々の内心の狀態がどんなだつたかと言ふ事は人々の想像に委せて置かなければならぬ。

それから恐ろしい懸崖をよち登り始めた。所々は自然の路であつた。が概して曲折した路になつてゐた。これはたしかにコールの古代住民が極めて刻んだものだ。一年に一度豫備の牧牛を向ふの牧場へ連れて行くために此の路

を通るのだとアマハツガー人は言つた。だがそれが眞實だとすれば、その牛は随分脚の達者な牛ばかりでなければならぬ。勿論此處では吾々の駕籠は役には立たなかつたので徒歩で行かなければならなかつた。

然し正午頃には吾々の一行は此の大岩壁の頂上の平たい廣場へ到着した。それからの眺望は實に莊大なものであつた。一方にはコールの平原が横がつてゐて、その中央にはかの眞理の殿堂の柱のある廢墟をハツキリと見る事が出来る。反對側には無限の憂鬱な沼地が續いてゐる。此の岩壁はたしかに昔は曾て噴火口の縁であつたのだ。その厚さは約一哩半ばかりある事が分つた。そして今尙硝子状の熔岩に蔽はれてゐる。その上には何も生えてゐない。然し所々に小さな凹地のある所には水溜りがあるので見た眼にホツとした様な感じを興へる。最近に雨が降つたのだ。一行は此の大岩壁の峰を越して行つた。そして今度は下り坂になつた。下り坂は上り坂ほど困難では無かつたかも知れないが、それでもなかなか峻険だつた。下りきつて了ふまでには日没までかゝつた。然しその晩は、沼地の方へ延びてゐる廣い傾斜地で安全に夜營した。

翌朝十一時頃になると、恐ろしい沼澤の海の中を無味單調な旅が始めた。此の沼澤のことは私が前に述べたことがある。

まる三日間と言ふもの濕氣や泥濘や、きわめて強い熱氣の中を通つて、駕籠かき達は足掻き進んだ。その内にさうとう、實に荒涼として案内者無しにはとても通れない地域を越して、吾々はカラリとしてうねうねとした土地に出た。この土地はありとあらゆる植物其他で蔽はれてゐる。が全く未開墾地であつた。樹木は殆ど一本も無い。次の朝になると此處で、かなり別れを惜みながら、老ビラリに別れを告げた。ビラリはその白髯を撫して、重々しく

吾々二人を祝つて呉れた。

「さらばぢや、獅々」ビラリは言つた。

「それから獅子、あんたにもおさらばぢや。これ以上あんた方を助けることはわたしには出来ぬ。だが若しあんた方が國へ歸ることが出来たらば、いよかの二度と再び知らぬ國へやつて來ようなぞとはせぬがよい。そんな事をすれば國へ戻ることが出来ずに、旅の終りに自分達の白骨で印をつける事になりかねない。ではもう一度おさらばぢや。これからわしはあんた方の事をちよよい思ひ出そう。獅々、あんたもわたしの事は忘れまい。あんたの顔は醜いが、心は正直だからの」

そしてビラリは身を返して去つて行つた。彼に擬いて背の高い陰鬱な様子をした駕籠かき達も行つて了つた。これがアマハツガー人の見納めであつた。吾々は彼等が虚の駕籠を擔いでうねうねと歩み去つて行くのを見送つた。それは丁度戦争で死んだ者を擔いで行く行列の様であつた。しまひにその行列も立ち昇る沼地の霧のために隠れて見えなくなつてしまつた。そこで此の廣茫とした荒地に二人きりで取残された私とレオは身を轉じて周囲を見廻した。それから互に顔を見合せた。

三週間前には四人の人間がコールの沼地に入つたのだ。そして現在ではその中の二人は死んでしまつた。生きてゐる吾々二人は、奇しくも恐ろしい冒険と経験を味わつた。その冒険の恐ろしさ、「死」の顔と雖も、これより恐ろしくは無い。三週間だ——たつた僅かに三週間——實に時の長さと言ふものは出來事の多寡によつて計られるもので、時間の経過によつて計られるものではない。吾々が捕鯨船に乗つたままアマハツガー人に捕へられてから三十

年も経つた様な気がする。

「レオ、吾々はザンベチの方へ向つて無理にも進まなきゃならない」私は言つた。「だがうまくザンベチへ着けるか着けないかそれは分つたもんぢやないさ」

レオはうなづいた。彼は近來めつきり口敷を利かなくなつた。それで吾々は出發した。着てゐる青物と、コンパス一つ、短銃と小銃と約二百發の彈藥との外には何も持つてゐなかつた。かくて吾々の大コール國古蹟訪問の歴史は終つた。

次で起つた事件や危険は、それぞれ違つてゐて奇怪なものであるが、熟考の上で私は此處には述べぬことに決心をした。

殘餘の事に就ては次の様に言へば充分である。即ち、信じられぬ程の艱難辛苦をなめた後で、吾々はザンベチ河に到着した。ザンベチは、吾々がピラリと別れた地點から北方約百七十哩の所に在ることが分つた。此處で吾々は六箇月間だけ蠻人の一族から捕へられて捕虜の身となつてゐた。その蠻人等は吾々を超自然的な生物だと信じた。それは主としてレオの若々しい顔と雪白の頭髮のためであつた。此の蠻人から逃れて吾々はザンベチ河を渡り、南方へあても無く歩いた。所が其處で、飢餓のために今にも死になつてゐた時に、幸にも混血のポルトガル人の狩獵家に出會つた。此のポルトガル人は一隊の象の後を追つて、内地深入り込んで來た者だつた。今迄これほど内地深く來た事は無いと彼は言つた。

此の男は吾々を親切にもてなして呉れた。そして此の男の助力に依つて、無數の冒險辛苦の末、終にデラゴア

に到着した。それが丁度吾々がコール沼地を出て來た時から勸定して十八箇月の餘にもなつてゐた。

そしてその次の日には幸福にして、喜望峯を廻つて英國へ航行する一隻の汽船に乗ることが出來た。本國へ向けての吾々の航海は都合よく行つた。そして、吾々は此の向ふ見ずな、一見すれば馬鹿々々しい冒險に英國を出發した日より丁度二年の後、サウザンプトンの埠頭を踏んだ。

今私は、自分の肩にレオをよりかゝらせながら、大學の昔の部屋でこの最後の言葉を書いてゐる。約二十年前に可哀相に吾が友ヴィンシイが記憶すべきその死の晩に鐵箱を持つてヨロケ込んで來た部屋だ。

此の物語りはこれを以て終結する。但し科學及び外界の世間に關係のある點だけが終結したのであつて、レオと私に取つて此の物語がどんな結末を告げるかは解らない。がまだその結末には至つてゐないと言ふ氣がするのだ。二千年以上も昔に始まつた物語だから遠いはるか未來にまで續くのも當然だらう。

レオはほんとにあの既録に書いてある古人カリクラテスの再生なのであらうか？ それとも何か不思議な遺傳的な類似のためにアツシヤが購されたのだらうか？ それにもう一つ疑問がある。それは此の再生の劇中にて、あのウステーンは昔のアメナルテスと何等かの關係が有るのだらうか、と言ふ事である。

曠者諸君はこれらの諸問題に就ては各自その意見を造り上げなければならぬ。それは他の諸問題に於けると同様である。私は既に自分の意見を持つてゐる。即ちレオに對して女神アツシヤの考へた事は正しいと私は思ふ。

夜中になつて私は一人で坐りこんで、自分の心腹で未來の暗黒の中を覗き込むことがある。そして此の大きな劇は、最後にどんな風に展開するだらうとか又は次の幕の場面は一體何處で開かれるだらうと思ふ。此の劇の最後の展

開が必ずある事を私は疑はぬ。所で遂に決してゆがまない運命や不變の目的通りにその最後の展開の幕が来た時にあの美しい埃及女アメンタルタスの演ずる役劇は一體何であらう？ 此の女を愛したばかりに僧侶カリクラテスはイシスの神への誓ひを破り、怒った女神の執拗な復讐に追はれ、リビヤの海岸へ逃れて来て、コール國で死の悲運に遭遇したのだ。その埃及王族の王女が最後に演ずる役劇はどんな役劇だらう？

彼女（H、R、Hへ）

沼を越え沙漠を越えた荒地の中、

熱に昏かれた森や鹹湖の中、

人に忘れて立つ不思議なコールの壁の中、

寂しき月光の下に立つ寂しいコールの塔の中。――

其處に呪はれた人々の文を綴りつゝアツヤシは世々をさ迷ふてゐるのではない。

世界は魔法から解かれた、

もう直ぐヨーロッパは

自分の闇謀を全世界に放たう。

さうだ、コール國ではない

何處にでも

町にも野にも貪慾な海のほとりにも

男は埋れた自分の戀人を想ふてゐる

男は自分の死んだ戀人のことを忘れずにゐる

さもなくば

聖なる神和に自の身を殺し、

己が宿命の境をも跳び越えかねぬ――

その墓の中、

その不死の中、

其處にこそ「彼女」は住まふ。

發行所

東京小石川
表町一〇九

合資
社

ア
ル
ス

電話小石川三五七〇番
振替東京二四八八番

有 所 權 版

大正十四年六月三日印
大正十四年六月三日發



譯 者 三 好 十 郎

合資社アルス代表者
發行所 北原鐵雄
東京市小石川區表町九番地

印刷者 牧野久尾
東京市小石川區盛久町四十五番地

不死の女王

定價 壹圓貳拾錢

—リライラ・—アラユピボ・スルア

◇泰西文藝の一般化叢書◇

第一編 深紅の腕 アラスラー作
火野 錫譯

妖艶人を魅する一歌妓に纏綿する怪奇なる殺人事件を描いた「深紅の腕」
其他ランドンの「愛の賊」レオナードの「恐怖の家」ホイルの「夜半の
劇」メイリーの「幽霊帳」を収めた。

第二編 メイ・フラワア號 イバニエス作
村上啓夫譯

潮の香高き南國の淫蕩なる一漁村を背景として船員と放蕩兒と淫蕩魅惑
なる一女性との深刻なる三角戀愛に絡まる血と涙の争闘を描き、芳烈の
香一讀恍惚たらしむる西班牙文豪のイバニエス氏の一大傑作。

◇興味中心高級讀物叢書◇

銀四料送・銀拾貳圓壹册各價定

—リライラ・—アラユピボ・スルア

◇泰西文藝の一般化叢書◇

第三編 生ける屍 フロースト作
牧 繁一譯

先きに倫敦警視廳犯人捜査課にあり、退いて現代英國作家の中堅たる著
者が其體驗を基として奇々快々なる殺人事件を描き戀愛と犯罪の關係を
細叙せる興味津津たる一大探偵小説。

第四編 青衣の乙女 ル・クウー作
藤岡良三譯

怪殺人事件の渦中に投げられた一盲目の一青年が音と匂と解感によつて
神秘不可思議なる事件を解決する云ふ高級なる讀者階級をも失望せし
めざる近來稀有の好讀物である。

◇興味中心高級讀物叢書◇

銀四料送・銀拾貳圓壹册各價定

◇泰西文藝の一般化叢書◇

第五編 惡友

ホオル・ドウ・コツク作
木村信次譯

神の如く善良にして羊の如く弱い主人公が突如として現はれた悪魔の如き悪友に誘惑され脅かされて新婚生活を荒され、放蕩三昧に沈没し零落のごん底に陥り放浪の旅先で悪友のピストルに斃れてしまふフランス人氣作者の哀切限りなきローマンスである。

第六編 軍人禮讚

バアチアド・シヨウ作
坪内逍遙 共譯
市川又彦

シヨウの代表作で、辛辣なる諷刺輕妙なる警句、淡々たる味はひ、しかもシヨウ一流の堂々たる識見、人生觀、社會觀は全卷に横溢してゐる。其他英文壇の巨匠ガルズワージーの社會劇「鳩」、佛の劇作家ブッワの「毀れ物」の二篇をも併せ収めた。

◇興味中心高級讀物叢書◇

錢四料送・錢拾貳圓壹册各價定

◇泰西文藝の一般化叢書◇

第七編 大なる飢ゑ

ヨハン・ホイエル作
内山賢次譯

北方のモウパスサンと稱せらるゝヨハン・ホイエルの傑作にして、其の暢達な活けるが如き描寫、簡素なる筆觸、鮮明な地方色の點出甘美な詩情悲痛な事實を包む明るい雰圍氣等、一讀三嘆巻を捲ふ暇も與へない。

第八編 恐怖の映畫

フレデリック作
瀧村積譯

本書は醜麗人を魅する一花形女優を周つて起る探偵小説である。神出鬼没、怪奇凄惨の事件は恰もフィルムに如く層々として展開し、波瀾重疊、最後まで讀書をして妖美魅惑戦〇の中に没頭せしめる。

◇興味中心高級讀物叢書◇

錢四册各料送・錢拾貳圓壹册各價定

—リラアイラ・—アラユピボ・スルア

◇泰西文藝の一般化叢書◇

第九編 青夫 人ブルジエ 著 五 味 拓譯

ブルジエは未だ日本の讀書界に紹介せられてゐない、佛蘭西のロマンシズム作家で、心理描寫に於て特に優れてゐる、本書は實に氏の代表的な作品であつて、筋の運びの面白さと描寫の巧緻さを以つて歐洲文壇を風靡せる一大傑作である。

第十編 モロオ博士の島 エツチ・ジイ・ウエエルス 著 木 村 信 次譯

エツチ・ジイ・ウエエルスは現英文壇の第一人者で、小説に、評論に、行くところとして可ならざるなき一大鬼才である。本書は氏の作品中最も特色ある科學小説にして、奇想天外の空想と豊富なる科學的知識を織り交せて巧に知會思想の批評と暗示とを與へてゐる。

◇興味中心高級讀物叢書◇

錢四册各料送・錢拾貳圓壹册各價定

—リラアイラ・—アラユピボ・スルア

◇泰西文藝の一般化叢書◇

第十編 モルグ街の殺人 エドガー・アラン・ポー 著 平 野 威 馬 雄 譯

現代探偵小説家の權威コナン・ドイルは「新奇、簡潔、簡潔、強烈な興味、印象の深さに於て、ポーは世界文學を絶した偉大なる創造的短編作家であり、また探偵小説の創造者である」と推賞したものである。

第二十編 歌妓の秘密 ジョルジュ・オネー 著 福 永 漢 譯

原作者は日本に未だ紹介されぬが、自國佛蘭西では人氣小説家の尤なるもので、本編は歴史上で有名なドレフェス事件を描いた最大傑作である。

◇興味中心高級讀物叢書◇

錢四册各料送・錢拾貳圓壹册各價定

—リラアイラ・—アラユビボ・スルア

◇泰西文藝の一般化叢書◇

第三十編 紅

い

花

ガルシン著
内山賢次譯

「悲哀の人」ガルシンそれは露西亞文學を流る者が等しく特異な魅力を感じず所の名である。本書には賣春婦と純心な青年畫家の戀愛を描いた悲痛哀切な長編加うるに他四編がある。

第四十編

麵麩を求めて

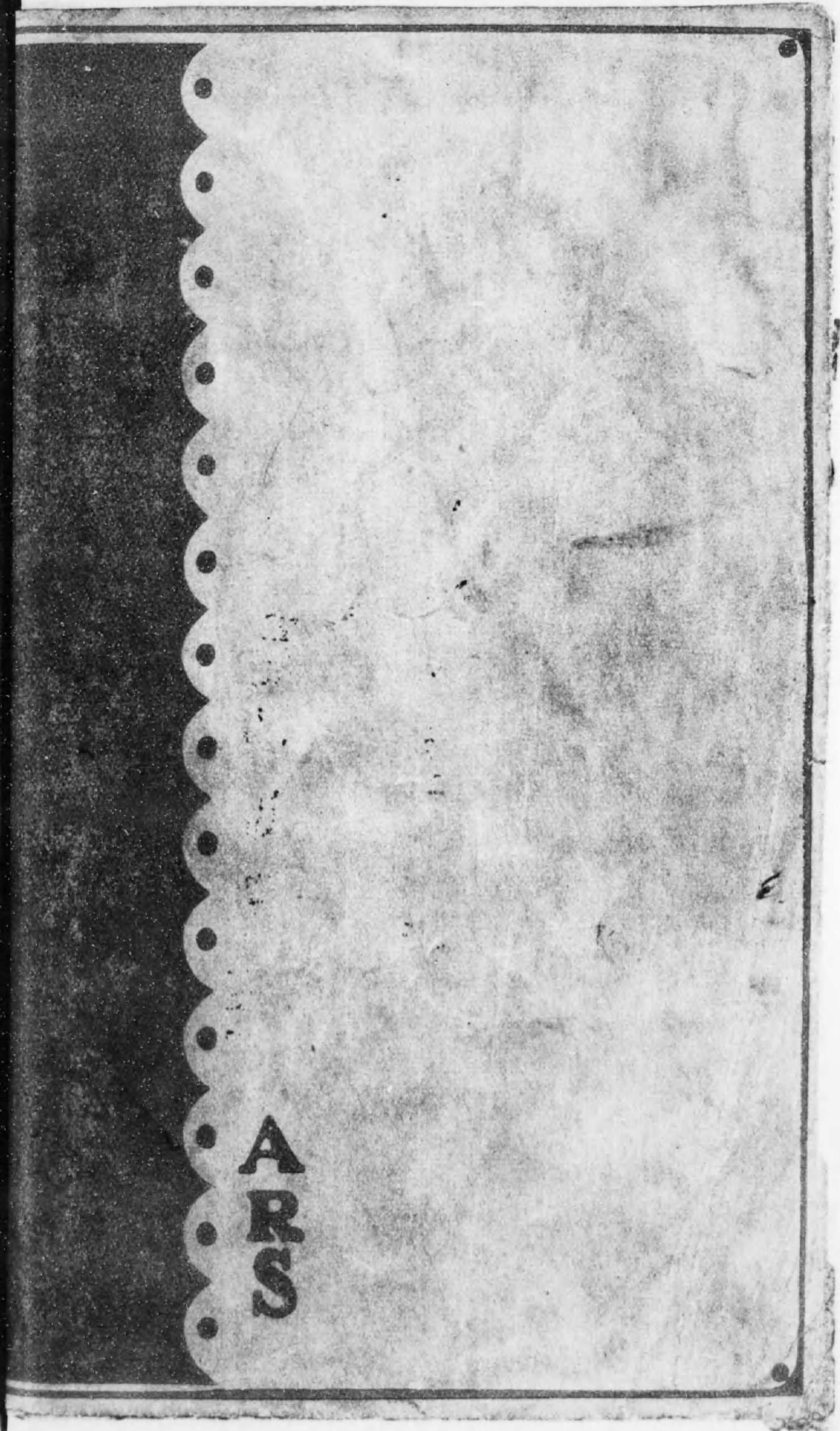
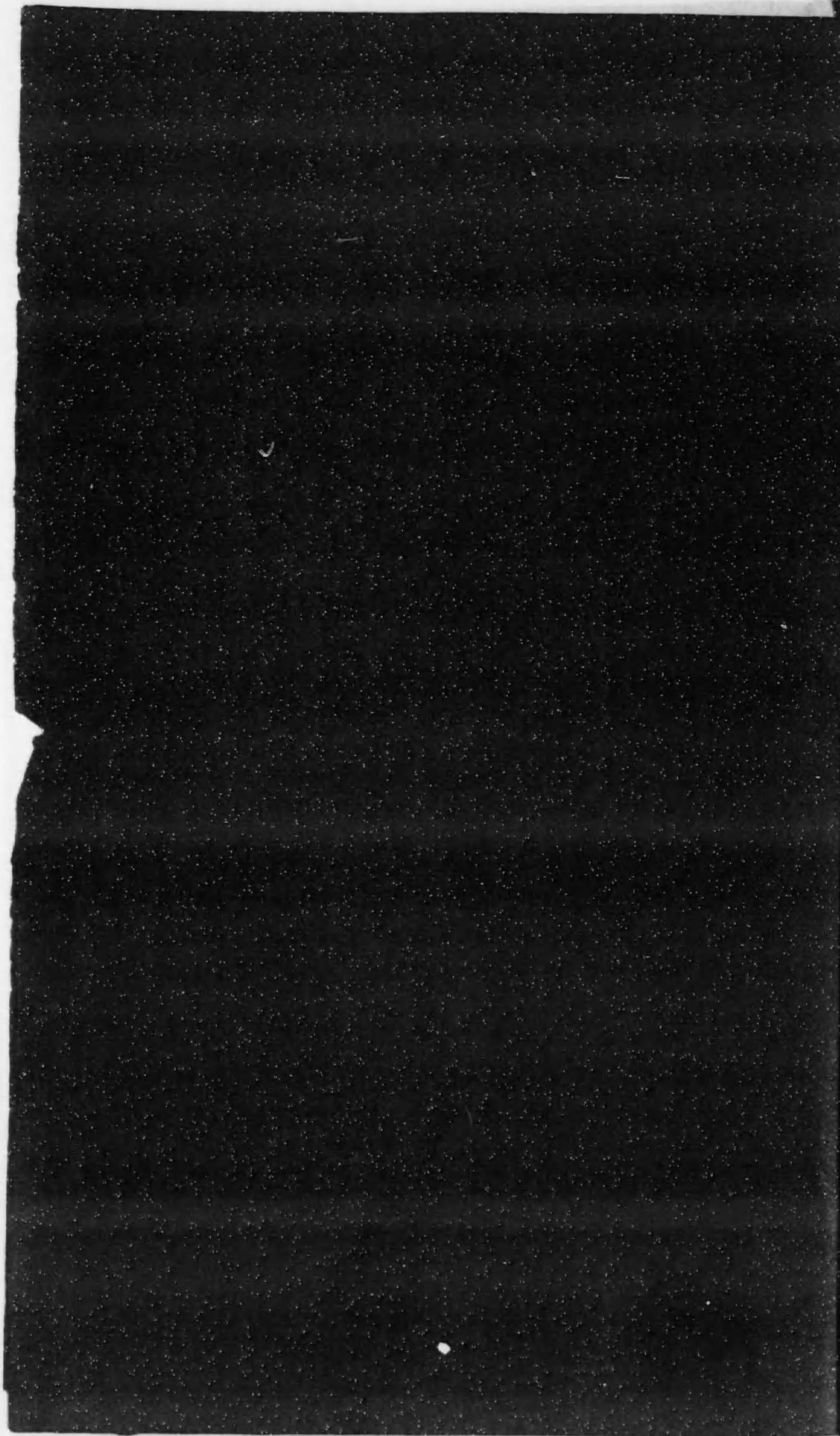
シエンキウイツチ著
村上啓夫譯

十九世紀最大の歴史小説家センキウキツチの牧歌的抒情詩的の優麗なる短編小説集で我が讀書界に初めて紹介せられたもので構想の雄大、巧な機智神と自然に對する魂の憧れを歌つた好讀物である。

◇興味中心高級讀物叢書◇

定各冊壹圓貳拾錢・送料四錢

527
P



ARS

527
8

終